
精霊物語

クロル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

精霊物語

【Nコード】

N 8 4 6 9 M

【作者名】

クロル

【あらすじ】

異世界へ精霊として生まれ変わり、人間を助けたり助けなかったりその他あれやこれやと生きていく男の話。 完結。

死神さんとブローグ

俺は昔から霊感が強かった。

家ではいつもネズミの幽霊が床を駆け回るのを見ていたし、学校では教室の天井から首を吊って白目を剥いている半透明の先輩から定期テストの出題傾向を教えて貰った。

動物園へ行けばフラミンゴの霊が耳を啄んでくるし猿の霊が頭の上を陣取る。

霊感がある上に霊に親しまれる体質だったらしい。墓参りに行った時に全身焼け爛れて顔が無い霊に愚痴を聞かされた時は勘弁してくれと思っただが、大体彼等は俺を楽しませ樂をさせてくれた。霊同士で姿は見えない様で、姿が見え触れないまでもコミュニケーションをとれる俺は有り難い存在なのだ、と市立病院に住むばーさんの霊は語った。あとなんか近くに居ると安らぐらしい。

昔からそれが当たり前だった。

幸い小さな頃から近所のおじさんの霊が着いていて（憑いていて？）色々アドバイスをくれたお陰で変な子扱いされる事はついぞ無かった。小中高と生きている友達も居た。

「と、こんな感じですかね。楽しい人生でしたよ」
「そうか」

深夜の自室で俺は死神さんに身の上話をしていた。よれたスーツを来て煙草をふかし、腰に草刈り鎌を下げた半透明なおっさんである。

一時間ほど前にネットサーフィンをしていたら彼が突然壁抜けしてパソコンの中から頭を出した。俺がビビって悲鳴を上げたら死神さんもビビって悲鳴を上げた。

とりあえず二人で素数を数えて落ち着き、死神さんが警察手帳みたいな死神手帳を見せて怪しい者じゃないと自己紹介をしてくれた。常人ならツツコミ待ちかと疑う所だが俺は抵抗無く信じた。物心ついた時から色々見て来たので今さら死神ぐらいで驚きはしない。

死神さんにあと一時間弱でお前は死ぬと言われても素直に受け入れた。死後の世界について一般人より若干知識があるので怖くはないのだ。

そして数百年ぶりに会話が出来る人間に会ったと言う死神さんに時間が来るまで軽く身の上話をして現在に至る。

「なかなか面白い人生談だったな……あと五分ぐらいか。死後のルールは分かっているか？」

死神さんはベッドに腰掛けて新しい煙草に火を点けながら言った。短くなって放り捨てられた煙草は空中で霧散して消える。

「強い未練がある場合は現在にとどまり自縛霊。未練が無ければ生前積んだ徳を貨幣に換算して、その量に応じて天国行きか地獄行きか決まる」

「そーだな。お前は天国行きだ」

「やっぱりですか」

死神さんは俺の心臓あたりを見ながらあっさり言った。確証を貰って少し安心する。

霊の皆に死後のルールを教えて貰ってから割と善行を積んだので地獄行きだったら困る。俺の世話をしてくれた近所のおじさんにも申し訳が立たない。

腰の草刈り鎌を撫でながら更に死神さんは続けた。

「天国行つた後のルールは知ってるか？」

「いえ、そこまではちよつと」

「そうか。天国行くと徳を換算した貨幣を使って生活できるんだよ。貨幣を使いきるまで極楽浄土を体験できる。天国は良い所だぞ。で、使いきつたら記憶を抹消してまっさらな魂に戻される。その後輪廻転生だな」

「はー……」

なるほど。そういうシステムになつてたのか。

「俺どれぐらいため込んでるか分かります？」

「平均の約三倍だ」

「つしゃ！」

人生……じゃない死後生勝ち組！ ひゃっふーマイムマイムでも踊りたい気分だ！

「おい落ち着け。ステップ踏むな。ウザイから」

「あ、すみません」

死神さんに疲れた声で言われて落ち着いた。死神さんはじつと俺を見ている。何か悩んでいる様子だったが、腕時計を見てから決心した様に口を開いた。

「なあ、お前転生する気あるか？」

「はい？ ……天国行きの人間は皆転生するんじゃないんですか？」
なんでそんな話を？ まさか死神の前で踊つたら地獄行きとかそういう規則が！？

「いや、普通の輪廻転生ではなく記憶を保つた転生だ」

「え、そんなんあるんですか？」

「ある」

「……マジですか」

「大マジだ」

大マジらしい。

「徳貨幣を大量に消費すれば可能だ。滅多にそれだけため込む奴はいないがな。それを成し遂げた有名所を挙げればキリストとシッダ

「ルタだな。ムハンマドはギリギリ足りなかった」

ムハンマドさん……

「ん？ そんな話をするって事は俺もそれだけため込んでるって事ですか？」

「いや、今の三百倍は必要だ」

「なんだそれえ！」

期待させといてバツサリ一刀両断ですか！ まあ記憶保持転生できなくても天国で楽しめれば良いけどさあ！

orzを作っているとおもむろに死神さんが立ち上がった。

「あ、時間ですか」

「まだ二分ある。話の続きだが……死神は天国に魂を護送する時に徳貨幣の一割を給料として頂く」

「はあ、そーなんですか」

「俺は独り身でな、煙草ぐらいしか趣味が無いから随分と徳貨幣をため込んでいる——お前の三百倍ほど」

「……それって」

「お前にその気があるなら転生代を払ってやろう。どうせ使わん金だ、俺の姿が見える奴になら惜しく無い」

一瞬降りる沈黙。

そして次の瞬間俺は力の限り叫んで死神さんの手を取っていた。

「うおお！ ありがとうございます！ いやありがとうございますってレベルじゃないなこれ！ 感謝を表す言葉が出て来ない！」

「よせ、照れるだろう」

上げて落としてまた上げるこの手際！ 死神さんホント惚れるわ！

俺が狂喜していると死神さんはまた煙草を捨てて頭を掻いた。

「あー、喜んでいる所すまん。残り一分切ったがまだ言う事がある。転生先は生前と同じ世界かランダムで異世界か二択なんだ。キリストは前者、シッダールタは後者を選んだ。今決めてくれ、どちらを選ぶ？」

「今ですか！？」

「早くしろ。あと四十秒だ」

死神さんは腰から鎌を抜いて手に持った。俺は急いで頭を回す。彼女はいない。祖父母は既に他界、両親は一昨年交通事故で逝ってしまった。気に入っているゲームシリーズの続編は出ないらしいし……

……現世に未練は無い。つーかあったら自縛霊になってる。

「えーと、異世界って魔法あったりします？」

「大体ある。残り十五秒」

「決まりました！異世界にして下さい！」

「ふむ。異世界を選んだ場合人外に転生する可能性もあるがそれでもか？」

「はあ！？」

「ちよ、それ早く言って下さいよ！ ミジンコに転生とか俺嫌ですよ！」

「いやそれは無い。転生先は一定以上の自我を持つ知的存在に限定される」

「なんだ良かった……なら異世界のままで」

「承知した……三、二、一、零……ではさらばだ」

鈴木藤吾、2010年6月7日午前零時二十分、心臓麻痺により死亡。享年二十二歳。

死神さんとプロローグ（後書き）

設定は完璧にできていますがストーリーは骨子しかできていません。色々妄想を織り込みながらぬるぬる進みます。もう一方の連載が終わるまでは不定期更新。

親指精霊

死神さんは大体の異世界に魔法があると言っていたが、俺は無事魔法がある世界に転生したらしい。こうして回想できているということは記憶も滞りなく引き継がれたという事だ。

さてなぜ魔法が存在する世界であるか分かったかと言うとなんの事は無い単純な話。

同族が生身で空を飛んでいる。以上。

更に言えば俺は「精霊」なる種族（男）に転生したらしく人では無くなっていたが、これにも特に驚きは無い。そもそも前世からして幽霊が存在するファンタジーまではいかずともオカルトチックな世界だったのだ。今更魔法ぐらいで、ねえ？ 異世界転生を希望したのも更なる不可思議の体験を期待しての事だったから驚愕より喜びが先に出了た。

前世でついた超常現象への耐性はありがたいとつくづく思う。冷静に周囲の状況を把握できる。

まずこの世界での俺の出自だが、精霊石と呼ばれる宝石から生まれた。赤ちゃんはコウノトリが運んでくるのよ的なアレではない。読んでそのまま宝石から生まれた。

精霊は一定以上体が大きく成長すると宝石吐き出す事ができるらしい。それがそのまま精霊石である。

吐き出した精霊石の大きさと反比例して母体となった精霊は小さくなり、精霊石は数百年かけて新たな精霊を生む。俺もそうして生まれた。精霊の里の倉庫にまとめて乱雑に放り込まれていた精霊石から生まれたので親が誰かは分からない。精霊は親が誰かなど気にしないらしい。俺もそんなもんだと納得して気にしない事にした。

出自を把握した所で次は自分の体とスペック。生活圈にある植物や生き物達と比較して考えて分かったのだが、体は人間の親指ぐらいの大きさ。そのくせ体格は大人と同じだ。

灰色の髪に灰色の目。イケメンでは無いがなんというかその……
落ち着いた、神秘的？ な顔立ち。ちなみに神秘的な雰囲気は精霊
全てに共通する。精霊的に見れば平凡な面だ。あと生まれた瞬間か
ら着ていた灰色のローブは体の一部らしい。

自分の体だが、生活圏にある植物や生き物達と比較して考えると
人間の親指ぐらいの大きさのようだった。生まれたばかりの精霊は
皆これぐらいの大きさで、年月と共に成長する。ネズミサイズから
狼サイズ、人間サイズにキリンサイズまで精霊の里には様々な大き
さの精霊が住んでいる。全員体格だけは大人なので少し不気味だ。
でもまあここではそれが常識なんだろう。ファンタジーだし。

俺が住んでいるのは深い森の奥にある精霊の里。ここにいる同胞
はざっと数えた所四十人ほどで、各自自分のサイズに合わせてキノ
コの家や木の洞や地下や泉の中に住んでいる。俺はというと俺が生
まれたのを最初に見つけた精霊の薦めで「ハウスタケ」なる安直な
ネーミングのキノコの中に住んでいた。

住み心地が良く、敵も居らず、仲間は皆心根が優しく話の引き出
しが豊富で、退屈しない。

俺はしばらくはこの精霊の里でのんびり暮らす事にした。精霊に
寿命は無いみたいだし、生き急ぐ事は無い。

年老いた太い木々の枝には蔭がからまり、頭上からの日の光を遮
る。しかし全てを隠してしまう事は無く、木漏れ日が数筋漏れてい
た。しっとりとした森の優しい風が俺達と草木の間を吹き抜けてい
く。

「今日はシンデレラの話进行しようか」

「おー」

「うむ」

「はーやくー」

今日も俺は自宅の屋根（キノコの傘）に腰掛けて、集まった仲間に物語を語っていた。

精霊というものは個人差はあるがアバウトな性格をしている奴が多く、転生初日に

「実は俺……異世界から転生したんだ」

と告白すると

「すげえ！」

と驚かれた。疑う気配ゼロだった。この時は知らなかったが精霊は嘘を見破るらしく、俺が嘘を言っていないのを感じ取り素直に信じたそうだ。

とにもかくにもものんびりとした精霊達は俺に前世の話をねだり、隠し事をする必要が無いと知り肩の荷を降ろした俺は毎日すこしずつ自分の体験談や頭に入っていた寝物語を語っているのだ。

「昔昔、ある国にシンデレラという人間の娘がおりました。彼女はいつも継母とその連れ子である姉たちに日々いじめられ、辛い思いをしておりました——」

分かりやすいように精霊風にアレンジして話を進める。

今語っているのは俺だが、仲間達も暇な時に代わる代わる俺に面白い話をしてくれる。ヒト族の少年と共に旅をした時の話。遠く離れた西の海の底で見つけた海底洞窟の話。仲間達の話に比べれば俺の話も（多少毛色は違うが）珍しく無い。ウン百年生きている先達は抑揚をつけ身振り手振りも交え惜しみなく知識を分けてくれた。

ガラスの靴を落としたくだりをハラハラして聞いている同胞を見ながら俺は思う。

この里には悪意が無い。皆俺に親切にしてくれ、適度に活気があり適度に静かだ。一人になりたければ一人にしてくれるしこちらが

言いたくない事には踏み込んでこない。

人によって異論はあると思うが、俺にとってここは紛れもない桃源郷だった。

親指精霊（後書き）

設定を小出しにするのが難しい

一気に設定を書き連ねてもうんざりするだけだから話に応じて上手く出していく形にしなければ……

マウスライダー

精霊の里は人間が立ち入れない森の奥にある。仲間の話によるとサラマンダーやバジリスクのひしめく砂漠を越え、ドラゴンやらライカンの住む渓谷を抜けた先に位置しているらしい。そんな魔境の先にある割には平和なんだけどなあ。ドラゴンどころかゴブリンもスライムも見かけないしさ。そもそもこの森に精霊以外の魔法生物が居るのかな？

精霊の森の気候は年中穏やかで、あまり四季が無い。ちよつと肌寒い、なんか暑い気がする、その程度しか気温が変化しない。おかげで精霊として生まれてから何年経ったか分からなくなった。

ハウスダケを三本ぐらい（寿命で枯れたので）住み替えているから多分三十か四十年くらいか？ よく分からん。精霊やってると時間の感覚が薄れるね。寿命無いし。

人間としての知識は残っても感覚はほとんど消え……ひねもすのたり、のたりかな。

俺が語る異世界譚の代わりに仲間が話してくれる冒険話譚を聞くと、ちよつと旅に出たくなった。旅と行っても遠くには行かない。里の外に出るだけ。

いやさ、精霊って何も食べずに呼吸だけで成長して、更に呼吸を止めても成長が止まるだけで死なないつつう訳の分からん生命体だから今まで里の外に出る必要が無かったのだよ。別に外に行かなくても仲間の話聞いてるだけで充分面白かったし。

個人的には魔王に返り討ちに遭った勇者の話がツボだった。姿消してこっそり城に侵入してサイレントキルしようとしたら何も無い所でコケたドジッ娘メイドにワインぶっ掛けられてばれたんだと。ははは、メイドのワインで世界がやばい。結果的には人間の軍勢に数で押しつぶされたと言うから勇者無駄死に。切ないけどこれ現実なのよね。

閑話休題。

何十年も日がな一日話していると話す事も無くなる訳で、要は話のタネを探しに出かける事にしたんだな。真上にあるお天道様を仰いでハウスタケの前で屈伸、伸脚、伸び。よっしゃあ行くぜ！

「トーゴ、今日はなんだか気合入ってるねー」

「あ、ちよいと里の外に出ようかと」

「おやまー」

お隣のハウスタケに住んでいる緑髪の精霊（女）はこてんと首を傾げた。

「何か欲しい物でも？」

「話のタネが欲しくて」

「そんな植物あつたかなあ……」

「いや今のは比喻表現だから」

「なーんだ」

あからさまにがっかりした様子の精霊に手を振って分かれ、俺はてってこ里と森の境に歩いていった。

苔むした岩の陰に生えるワラビもゼンマイも俺の目線からすると木に近い。俺の身長は人差し指ぐらいに伸びていたが、相変わらず

森の木々は大迷宮だった。迷いそうだが迷わない。道を覚えるのは前世から得意だった。それに里からあまり離れる気も無い。

もうね、世界樹が乱立するたわけた世界に入りこんだ気分だ。精霊の里はちょっとした広場みたいになっているのだけでも、一步森の中に入ると下草が生えてて薄暗く歩き難い。

飛ばうかな。精霊だから俺も飛べるはず。でも飛び方知らない。里の中に居れば飛ぶ必要も無かった。

しばらくえっちらおっちら草の林を掻き分けて進んでいたが、何も見つからずしんどくなったので小石に腰掛けて休憩。草と土の匂いを胸いっぱい吸い込んでばけつとする。上を見上げたが大木の枝葉が絡まりあい空は見えなかった。

なにやってんだか、と自分でも思う。でも苦にならない。疲れな上に汗もかかないのは超生命体精霊の特色である。転生して数十年経った今でも時々思うが精霊はどんだけ凄いのか。

目を閉じ耳を済ませて森のざわめきを聞いていると、がさごそと草を掻き分けて何かが近づいてくる

音がした。あまりでかい音じゃない。虫か、小動物か。どちらにしても精霊を捕食する者は世界のどこにも存在しないらしいので座して待つ。

未知との遭遇に胸を高鳴らせ、はしなかったがそこそこワクワクしている俺の前に現れたのは毛の覆われた髭面だった。

ちゅう、と鳴いて尻尾をゆらしながら近づき、つぶらな瞳で俺を見る。完膚なきまでにネズミだった。

「ハローネズミ君」

手を挙げて声をかけてみたが返事は無い。じっと髭をぴくぴく動かして俺を観察していた。

「……喋れる？」

問いかけてしばらく待ったが返事は無し。極普通のネズミのようだった。

そろそろ手を伸ばしてこちらの様子を伺う。ネズミはちゅうと鳴

いて俺の手を舐めた。うはあ、くすぐりたい。でもなんかいい。

「お前さあ、もしかして俺に何か用でもあった？」

ちゅう。

「何も無い？ お前も暇つぶし？」

ちゅう。

「ちゅう、じゃ分かん。どっち？」

ちゅう。

「……毛皮撫でていい？」

ちゅう。

「そうかそうか」

やはり話を通じなかったので勝手にYESと解釈して撫でる事にした。しかし野生のネズミは毛がごわごわしていて撫で心地が良くない。ペットじゃないのだからこんなもんだろうけど裏切られた気分だ。

「やつばさあ、ここで自慢の毛皮の撫で心地で俺を魅了するぐらいやってくれるべきじゃね」

ちゅう。

「だからちゅう、じゃ分かんないって。あ、おま、ダニついてるぞ」
ちゅう。

「うお、ダニでけえ。こんな付いたらしんどそうだな。よ、と……あれ、こいつ取れないな……駄目だ食いついてやがる」

ネズミが痛そうにちゅうちゅう身をよじったので無理やりはがすのは止めておいた。前世の知識からダニ対策法を掘り起こす。火に弱いんだっただか？ でも森の中に火なんて無いしなあ。仮にあっても火事が怖いから使えない。

「里に行くか？ 誰かダニ取りの方法ぐらい知ってると思うからさ」
毛皮を撫でつけながら聞くとネズミはちゅうと鳴いてその場に伏せた。なんだ？ ……背中に乗れってか？

「お前言葉分かるのか」

ネズミはちゅう、と一本調子で鳴いた。よくよく考えてみるとこ

いつ、俺が何か聞くとタイミング良くその直後に鳴いていた。

「喋れないが言ってる事は分かるって訳か。肯定なら鳴くな」

「……………」

今度は鳴かなかった。確定だ。俺は伏せたままだった賢いネズミの背中にまたがる。さわり心地は悪かったが乗り心地は案外悪くない。ネズミは尻尾をぶんぶん振って立ち上がった。

「お前里までの道分かる？」

「……………」

沈黙。YESだ。

「うむ。にしてもいつまでお前お前じゃ悪いな。お前名前ある？」
ちゅう。

「んじゃ、えー、あー、ジングルスって呼ぶわ。ネズミのMr.ジングルス。OK？」

ジングルスはその場でくるくる回ってちゅうちゅうちゅうちゅうと何度も鳴いた。ネズミの感情表現は知らんが嫌がっているように感じない。嬉しいらしい。喜んでもらえてなによりだ。

「ちょ、ジングルス、そろそろストップ。酔うから。目が回るからひとしきり好きにさせてから首を叩くと素直に止まってくれた。首を振って背中に乗った俺を見上げてくるのでGOサインを出す。そしてジングルスは俺の五倍はあろうかという速度で里に向かって駆け出した。

マウスライダー（後書き）

ネズミの名前はグリーンマイルから。モートソグニルにしようか
迷いましたがこっちで

まほうじつぢ

ジングルスに乗って精霊の里に戻り、隣に住む緑髪緑目の精霊――シルフィを訪ねてダニを駆除してもらった。快くダニ退治を承諾したシルフィは指先の温度を上昇させ、ちよいダニをつつく。つつかれたダニは面白いぐらい簡単にポロポロ落ちていった。

「それ魔法？」

「そーだよ」

「だよなあ。シルフィ、俺に魔法教えてくれない？そろそろ使いたい」

「あれ？トーゴまだ魔法使えなかったんだ」

「別に使えなくても困らなかったしさ」

「まあそうだね」

シルフィは頷き、嬉しそうに鼻を擦りつけてくるジングルスをあしらいながらどこからともなく小さな黒板を取り出した。黒板を部屋の壁に立て掛けて手品の様に博士帽やらチョークやらをだし始めたので、俺はジングルスの背中に座って傾聴の姿勢をとる。ジングルスも心なしに真面目表情になっていた。

皆の話には当然の様に魔法という単語が出て来ていたが、ウン十年精霊やっていて未だ具体的な発動法は知らなかった。精霊としてそれはどうなんだと自分でも思う。

「さて」

黒板に「特設魔法講座」と書いたシルフィは指示棒を片手に俺達を振り返った。

「先に結論を言つとね、精霊は念じるだけで全ての魔法を使えるんだけど」

「なんだそれ！」

「いやホントに。精霊嘘つかない」

「それは知ってるけどさあ……じゃあなんで今まで空を自由に飛び

たいなとか思っても飛べなかつたんだ」

矛盾してるだろ。念じるだけで全てが思いのままだったら世話無い。

訝しむ俺にシルフィはわざわざ口でチツチツと言いながら指示棒を左右に振った。

「甘いよトーゴ。あれだけ皆の冒険譚聞いてたんだから魔法に必要な物ぐらい分かるんじゃない？」

「魔力」

「正解」

即答した俺に頷き、シルフィは黒板に大きく「魔力」と書いて丸で囲んだ。

「こんな理屈を説明しなくても割とフィーリングでいけるんだけど、トーゴは理屈が好きだから理屈っぽく教えてあげましょう」

「……ありがとうございます」

「いえいえ」

頭を下げ合う。

「えーとね、この世界にはトーゴが元居た世界には無い二つの魔法要素があるんだよね。と言うか二つしかない。この二つの魔法要素以外は全部トーゴの世界と同じ……はず。一つは魔法発現要素の「マナ」

シルフィが「魔力」の下にMと書く。

ちなみにが今俺達が喋っているのも書いているのも精霊語だ。Mは精霊語でアルファベットのMにあたる記号だと解釈してくれれば良い。

「もう一つは魔法妨害要素のレジステル」

Mの横にRと書く。

「マナは効率の良い魔法発現を促す世界中どこにでもある要素なんだけどね、特に生物の中に多いかな。空気中よりも森の木とか、人間とか、ジングルスの中にも多いよ。周囲のマナが多いほど魔法のコストパフォーマンスが良くなるから、人間なんかは自分の体を強

化する魔法を頻用するわけ」

シルフィはMを指示棒で叩き、次にRを指した。

「レジステルは魔法の発現を阻害する要素だね。マナは感じられるけど見えないし触れない。でもレジステルは感じられない代わりに見えるし触れる。沢山集まれば結晶化もする。レジステルの結晶に当てた魔法はどんなに強力な魔法でも消えるよ」

「……あれ、魔力の話は？」

「急くな若者。今からするから」

シルフィはMとRの間に+記号を入れ、矢印を引つ張りその先にMRと書いた。更にMRの横に魔力、と書き込む。黒板には

$M + R \downarrow MR + \rightarrow \text{魔力}$

という式が現れている。なんのこつちや。

「つまりマナとレジステルを合成した時に生まれたエネルギーを魔力と呼ぶんだよ！」

「な、なんだってー！」

「ちゅー！」

「……ジングルス空気読めるなあ」

ジングルスは得意気に髭をぴくぴく動かした。

シルフィは床に叩き付けた指示棒を拾い、咳払いをして続ける。

「とにかくそうやって生まれた魔力を、てやー、ってすると魔法が発現するのね」

「いきなり抽象的になったなあ」

「いやいや、精霊は皆こうだよ。誰に聞いても、てやー、とか、そいやあ、とか、どっせい、とか言うし」

適当だ。本当かよと思うがシルフィに限らず精霊は嘘をつかない。てやー！　で魔法が使えるのは事実だろう。とても呪文には聞こえない。ナンテコッタイ……ん？

「マナがどこにでもあるのは分かったけどさ、ならレジステルはどこにあんの？」

レジステルが無いとてやー！　以前の問題だ。尋ねるとシルフィはまっすぐ俺を指した。

「トーゴ」

「何？」

「トーゴ」

「いや、だから何？」

「いや、だからトーゴがレジステルの結晶」

「……………」

なん……だと？

驚愕する俺を楽しそうに見ながらシルフィは説明する。

「魔法を使うとM Rが——単純にくっつけてマステルって呼ぶんだけど——出来るでしょ？ M Rは特に利益も害も無いん要素なんだけどね、MとR合成してM Rを作るばっかだと世界がM RだらけになつてMとRが無くなるじゃない？」

「え、ああ。まあ確かに……あれか、酸素と二酸化炭素みたいなイメージか」

「そうそう、そんな感じ。それでどーして世界がM Rだらけにならないかって言うとな、精霊とか魔法生物がM Rを取り込んで分解して、Mを放出してRを取り込んでるからなんですよこれが。まあ物質を含まず純粋なレジステルだけで体を構成してる生物なんて精霊だけなんだけどー」

「えー……ちよつとストップ。整理する」

世界には魔法を補助する要素マナと、魔法を妨害する要素レジステルが存在する。マナとレジステルを結合させると魔力が発生して同時に無害なマステルが出る。で、魔力は念じると魔法になる。

マスターは精霊やら魔法生物が分解してレジスターを取り込みマナを放出。光合成みたいだ。

なんか高校で習った酸素と二酸化炭素の循環図を思い出した。

「OK、理解した。でもさ、それだと精霊は自分の身体削って魔法使う事にならないか」

「ああ、その通りだけど大した量じゃないから大丈夫。一カ月超強力な魔法を使い続ければ背がほんの少し縮むかも知れない、ぐらいかな。普通は成長の方が早いよー」

「そりゃ良かった」

「うん。じゃ、魔法使ってみようか。ほらほらまずは合成！」

シルフィが手を叩いて促すがよく分からない。

「そもそもマナがどこにあるか分からん」

「だからどこにでもあるんだってば。てきとーてきとー。考えるな、感じろってやつ。あ、なんだったらジングルスにくつついてみたら？ マナが濃いからやり易いと思うよ」

「あなたと合体したい……！」

「ちゅー」

抱き締めようとしたら言葉に不穏な気配を察したらしく後ずさって拒否られた。傷つく。

「いやあのごめん、合体ってかマナを貰うだけだから。頼むジングルス」

頭を下げるとそろそろ前足を差し出してくれた。その足を握り、目を閉じて集中する。

えーと……なんか来い！ 弾けて混ざれ！

「あ、できた」

超感覚的にやったのにあっさりできました。

ジングルスから出た何かが俺の体表を微かに削って放出された何かと合わさり、威圧感を伴う力の塊が膨れ上がった。

「なんかすげー」

ハウスキノコ一杯に……いや、ハウスキノコから溢れ出してたゆ

たう魔力にただただ圧倒される。魔力は暖かい様な鋭い様な香しい様な白い様な甘い様な変な感じだった。五感のどれにも当てはまらない感覚でそこに魔力があるのが分かる。一度魔力を合成を経験したからなのか、空気やジンゲルスが持つマナも感じ取れる様になっていた。

「発生した魔力は放置すると拡散して消えるからね、拡散する前に早めに魔法使いなよ。まあ里はマナが多いから拡散しにくいんだけど」

「マナは拡散も防いでくれるのか」

「そう。言って無かった？」

「言って無かった」

「どんまい！」

それは俺の台詞だと思ったが言わないでおく。あれこれしている間に拡散してハウスキノコ内に納まる程度まで減ってしまった魔力に、なんかこう……気合いを叩きつける。

「I can fly！」

宙を舞うイメージを付加された魔力は変質しながら勢い良く俺の身体に入り込んで来た。よっしゃ俺は風になる！

そして片手を上に突き上げて飛ぼうとして、

……無様に転んで床に転がった。あれ、なぜだ。

「トーゴ……精霊には魔法効かないんだよ」

「え、それじゃ皆が空飛んでる様に見えたのは俺の目の錯覚？」

「あれは靴に飛行魔法かけてるの」

なんという落とし穴。精霊は間接的に魔法を使わないと飛べないのか。

お前はよくやったよ……という雰囲気で慰める様に前足で肩を叩くジンゲルスの優しさに全俺が泣いた。

まほうじっずざ（後書き）

シルフィが指に熱を集めていましたが、あれは正確には指の周囲に熱を集めているだけです。魔法熱なので火傷はしません。

精霊はデフォルトで服を着ていますが裸足です。靴は自作。

あといつの間にか無意識に話にネタを組み込もうとするようになった自分の指に驚愕中

精霊の湖

ジングルスは普通の鼠だ。知能は妙に高いがそれ以外はとことん普通だ。身体能力も、寿命も。

一般的な野鼠の寿命は二、三年だと聞く。従ってジングルスの寿命も二、三年。出会った時点で既にジングルスは成体になっていたから残る時間は一年か、二年か。実質無限の寿命を持つ精霊にとつて一年は瞬きする間に過ぎてしまうほど短い。

俺は日の当たる森の広場でジングルスの背中に寝そべり、良く晴れた青い空を見上げながら問い掛けた。前世も今世も空の青さは変わらない。

「なあ、ジングルス」

「ちゅう」

「長生きしてみるか」

「……ちゅ？」

背中の下で毛皮が微妙に動き、ジングルスが首を傾げているのが分かる。俺は空を見上げたまま続けた。

「今は皆の冒険譚聞いているだけで楽しいけどさ、何十何百年も日が一語り合えば話のタネも尽きるだろ？ そしたら俺も精霊の里を離れてさすらってみようかと考えてんだよ」

「……………」

「ジングルスと居ると楽しいからさ、俺としては一緒に旅に行きたい訳だけど精霊と違って鼠はすぐ死ぬだろ。だからジングルスさえ良ければ魔法で寿命延ばすか無くすかしたい」

「……………」

「どう？」

「ごろんと転がってうつぶせになり、逆さまにジングルスの顔を覗き込む。ジングルスは鼻をぴすぴす動かして考え込んでいるようだ。若干額にしわが寄ってる気がする。」

魔力を少量合成、意思疎通魔法を使ってみるとジングルスの思考が薄く伝わる。

困惑と、喜びと、躊躇。流石に即決はできないか……つか鼠の脳で今の提案を理解したジングルスは人間並の精神構造を持っているんじゃないか。

俺は悩むジングルスの肩を優しく叩いて言う。

「すぐには決めなくていい。一生モンの問題だからゆっくり決めようぜ」

ジングルスは返事の代わりにふっと肩の力を抜いてのんびり寝そべった。

広場でジングルスに宿題を出した翌日、俺はジングルスに乗って空を駆けていた。風を切り、森の梢をかすめる様に宙を踏んでチョロチョロ走る。

靴に飛行魔法がありなら鼠に飛行魔法もありかなと思った。ムシヤクシヤしてやった。反省はしていない。

「HEYジングルス、体力は持ちそうか？ 休憩しとく？」
「ちゅう」

元気の良い鳴き声が頼もしい。俺は振り落とされない様にジングルスの毛皮を掴み直した。

今俺達は精霊の森の北にある湖に向かっている。シルフィの話によると人間の身長を大きく超えるまで成長した精霊達が住家にして

いるらしい。

精霊は体の大きさに合わせてハウスキノコ↓木の洞↓岩窟などと家を変えるが、でくなり過ぎると手頃な家が無くなる。中には自分用の城を建てる物好きな精霊もいるらしいが、ほとんどの精霊は噴火口や湖や海の底に沈んでみたり鍾乳洞を適当に拡張してみたりしてそこに住む。

今日訪ねるのはそういう精霊が寢床にしている湖だ。

幸い精霊の里からあまり離れておらず、鳥に追いかけられたり強風にあおられて針路をずらされたりしながらも一時間弱で到着した。螺旋状に弧を描きながら高度を下げ、キラキラと日の光を反射して輝いている砂浜に着地する。

俺はお疲れさん、とジングルスを労い、背中から降りて湖を見渡した。

「うーむ、でかいのか小さいのかイマイチ分からん規模だなー」

池と言うにはあまりに広過ぎ、かと言って向こう岸へ行くのに苦勞しそうな広さでも無い。成人の男なら三十分もあれば充分一周できる広さだった。

さざなみを立て湖面を渡る風のせい、微かな波が打ち寄せている水際から水面を覗き込む。透明度は結構高い。水底にはガラスの様に鈍く輝く砂利から青々とした水草が生え、ゆらりゆらりと揺れていた。水草の陰に隠れていた小魚と目があつたが特に逃げる気配も無く、のんきにエラを動かしている。

「ジングルス、入ってみる？」

「ちゅう」

振り返るとジングルスは水際から少し離れた浜でぷるぷる首を横に振っていた。

まあネズミだからなあ。水は苦手か。

特に何をしに来たという訳でも無いのでとりあえずは水の中に入ってみた。ひんやりと冷たい。膝まで水に浸かって所でふと服はどろろりやいいんだ、と思った。

脱いだ方がいいのか？ でも体の一部だしなあ。

しばらく悩んだが気にしない事にして水中に飛び込んだ。

水の重さは全く感じず、まるで空を飛んでいるようだ。ゴーグルは無いが水中の様子ははっきりと見える。

試しに魔法で水流を作り出し背後から当てると猛烈な勢いで一直線に進んだ。すげえ、カツオかマグロにでもなった気分だ。

しばらく人間魚雷ならぬ精霊魚雷になって小魚とチェイスしたり以外と水中では俊敏な亀を追いかけ回したりしていたが、メダカに似た黒い魚の群に紛れ込んでスイミーごっこをしている途中で水底に寝そべってぐーすか寝ている精霊を見つけた。

深い蒼色の長髪を海草の様に揺らめかせた女の精霊だ。羽衣の様な水色の服を身に纏い、岩を枕にして熟睡している。俺は群からそっと離脱し精霊の方へ泳いで行った。

でかい、というのが間近でその精霊を見上げて思った最初の感想だ。親指の第一関節だけで俺の身長と同じくらいある。巨人の国に迷い込んだガリバーの様な気分だった。精霊ってこんなにでかくるのか。

「もしもし」

鼻先まで泳いで近付いても反応が無かったので声をかけながら額をペしペし叩いてみた。それでも反応が無いので長い睫毛を引っ張ってみる。

よっこいしょ、どっこらしょ、それでも睫毛は抜けません。

なかなか抜けないので段々ムキになって最後は全力になった。しかし抜けない。抜ける気配も無い。

精霊を起こすという当初の目的を忘れかけた頃、ようやく瞼が震えて開いた。

髪と同じ色彩の蒼い瞳に俺の姿が映っている。精霊はぼんやり瞬きをしていたが、すぐに俺に焦点を合わせた。

「んむにゃ？ ……あら、おはよー誰かさん」

緩慢な動作で起き上がり、膝を曲げてぺたんと座る。少女が若い

女性がやれば様になっただろうが見上げるほど大きな女精霊にやられると威圧感しかなかった。

「誰かさん、名前は？」

「……トーゴ」

「聞き覚えないわねー。最近生まれた子かな。あ、私は……えーと

……デ、ディ……ディーネ？ だから？」

「疑問系で言われても」

「名前忘れちゃったのよー。でも多分ディーネで合ってるわ」

たははと屈託無く笑うディーネはやはり精霊特有の神秘的な顔立ちだった。

神秘的と言っても静かな炎を連想させるものだったり大山を思い起こさせるものだったり色々だが、ディーネは静かな海を思わせる雰囲気纏っていた。精霊は大体髪の色と顔立ちが一致している。

やっぱりでかいなーと見上げているとディーネは首を傾げた。

「私の顔に何かついてる？」

「いんや、ついてないけど。どれだけ生きたらそれだけ成長するの
かと思って」

ディーネはますます首を傾げた。はあ？ とかほへ？ とか言いながらどんどん傾けていく。とうとう90度を超えて首折れるんじゃないかと心配になり始めた時、急にバネ仕掛けの様に首を戻してポンと手を打った。

「あー、そっか。随分長い事眠ってたから。ちょっと待っててね」

ディーネは無駄にでかい胸に手を当て、大きく息を――水を吸い込んだ。

なんだなんだ。何が始まるんだ？

好奇心をかき立てられて注視する俺の視線を気にせずディーネは深呼吸を繰り返す。

何度目の深呼吸か、唐突にさらりと胸の辺りから粒が舞った。

最初の一粒を皮切りにさらり、さらりと小さな粒は次から次へ零れ落ち、その砂粒は水底に舞い降りてゆっくりと小さな山を築いて

行った。

水底まで届いた弱い光を反射しキラキラと輝く。ガラスの様なそれを見て俺は不意に閃いた。

この湖の底に溜まっているのは、浜を作っているのは、ただの砂利じゃない。小さな精霊石だ。

精霊は一定以上成長すると宝石を吐き出す事ができる。デイーネほど大きければ当然吐き出せるだろう。

デイーネの体は吐き出した精霊石の粒に反比例して縮んでいった。一カ月超弩級魔法を使い続けてようやく精霊の背は微かに縮むと言う。そんな機会は滅多に無い(らしい)から、精霊はストツパー無しで容赦無く成長する訳で。なるほど、でかなり過ぎて困ったらこの湖に来て精霊石を吐き出すのか。納得だ。

デイーネはひたすら吐いて吐いて吐き出し続け、やがて人間の成人女性くらいまで縮むとようやく止めた。ふう、と一息ついたデイーネの前には精霊石が小山を作っている。俺の身長なら登山できそうだ。

……いや待てよ？

「精霊石って数百年放置すると精霊になるんじゃないかなかったか」

まさかこの湖は時期が来るとサンゴの産卵の様にミニ精霊がポコポコと……

「うん？ それは大丈夫よ。精霊石はこれぐらいの大きさが無いと精霊にならないから平気」

デイーネはそう言って右拳を軽く握ってみせた。

なんだ、なら安心だ。精霊は寿命が無いし絶対に殺されないからこんなに大量発生したら世界が精霊だらけになる。

デイーネは精霊石の小山に魔法で作った水流を当てて平らにならしながら俺に精霊石についてあれこれ教えてくれた。里の倉庫に放り込んである精霊石はだいたいがうっかり大きな塊を吐いてしまった時のものらしい。そうか、うっかりなのか……なんだかなあ。

しばらくディーネと互いの身の上話を中心に話し込んでいたが、頭上から差し込む日の光が茜色になり長居をし過ぎた事に気が付いた。

精霊の里に門限は無い、と言うか住むのも出るのも勝手な所なので、別にふらりと数日でも数百年でも出掛けて問題は無い。しかし今日はシルフィに精霊の湖の近況を教えに帰る約束をしていた。早めに帰らなければ。

ディーネにまた来る約束をして別れを告げる。一直線に上へ向かい、水面に顔を出して岸の近くまで泳いでいくと、ジングルスが砂浜の一角を穴だらけにしていた。砂浜から掘り出したらしい二枚貝を小さな両手に抱え夢中で歯を立てている。側にはこじあけられた貝殻が何枚か散らばっていた。俺が話し込んでいる間ジングルスはジングルスで楽しんでいたようだ。

「ジングルス、帰ろう」

水から上がって声をかける。ジングルスはためらう様に手に持った貝と俺の顔を見比べていたが、諦め切れなかったらしく貝を抱えたままその場に伏せた。乗れ、という合図だ。

遅くならない内に帰りたいが一刻を争う程でもない。俺が苦笑してそれを食べ終わってからでいいよ、と言うとジングルスは大急ぎで貝に歯を立てた。余程気に入ったらしい。

今日はジングルスにとっても俺にとっても有意義な時間だった。また来よう。

精霊の湖（後書き）

精霊達に上下関係は一切ありません。全員呼び捨てで呼び合います。

迷宮計画

精霊には色欲と食欲が無い代わりに娯楽欲とでも言うべき欲がある。

里から離れて面白そうな人間にくつついて行ったり、広場に集まって自分の冒険譚を語り合ったり、それらは全て娯楽欲を満たすために行われる。

茶髪で渋い顔をした男の精霊、グノーはアクティブに娯楽を求める奴だった。何かでつかいことをやりたいと広場で皆に相談していたのでダンジョン経営を進めてみる。

この世界、魔王は居たのにダンジョンは無いと聞いている。折角のファンタジーなのに勿体ない。ロマンだろ、ダンジョン。

「だんじょん？　なんだそれは」

「俺の元の世界にあつた……と言うより元の世界で空想として存在した……あー、地下迷宮」

「地下に迷路を作るのか」

「そう」

「うーむ……」

グノーは腕を組んで首を傾げた。ピンとこない、という顔をしている。俺は言葉を重ねた。

「勿論地下に穴掘って迷路を作るだけじゃない。罫とお宝とモンスターを設置する」

「ふむ？」

俺は魔法で空中にホログラムを作りながら説明を始めた。グノーの他にも近くで日向ぼっこをしていた精霊達がなんだなんだと寄ってくる。

「まずこんな風に階段を作って迷宮を何階層かに分ける。で、各階層にお宝を置く。下の階ほど良い宝があるようにする」

アリの巣の様な三層構造のダンジョンをホログラムで作り、宝を

示す青い光を幾つか点滅させた。チラリと目をやるとグノー達はふんふんと頷きながら聞き入っている。

「人間はお宝目当てにダンジョンに潜るだろ？ 下の階ほど良い宝があるんだから下へ下へ潜って行く訳だ。でもそれを放置するとダンジョンのお宝はあつという間に取り尽くされるから、罠とモンスターを設置して宝探しを妨害する」

今度はダンジョンに無数の赤い点を点滅させた。グノーが手を挙げる。

「質問だ。モンスターとはなんだ？ 魔法生物の事か？」

「あー……いや、できればダンジョン固有の擬似生物を創造した方が良いかな。魔法生物を捕まえてきて地下迷宮に放り込むのも可哀相だし」

「トーゴのネズミみたいなもんか」

「ジングルスはモンスターじゃなくて俺の相棒。モンスターはもつと凶暴で人間を襲う」

ジングルスは俺と共に永い時を歩むと決断してくれていた。精霊の湖のレジステルを体積で言うとな人間の大人三人分消費し、不老不死になっている。不老不死って阿呆みたいにレジステル消費するんだよな。

お陰で精霊の湖一帯が大量のマステルで満たされた。当分あの辺りでまともな魔法は使えそうに無い。精霊にしてみれば成長源が増えただけの話だけでも。ディーネも嬉しそうだったし。

「とにかく、人間は罠とモンスターを潜り抜けてお宝を手に入れる訳だ。富と名誉、あるいは他の何かを求め、夢と武器をもってダンジョンに挑む人間達！ 知恵と力を振り絞ってモンスターを倒し、その先にある財宝を掴む！ 時には傷つき負けて挫折する。失敗する。再起不能になる者も出る。しかしリスクを補って余りある財宝！ 閉鎖された空間の中で生まれる人間達のロマンス！ 葛藤！

裏切りと信頼、友情と愛情！ …… どうか？ ワクワクしてきた？ 俺はワクワクしてきた」

「俺もワクワクしてきた」

「俺も俺も」

「私も」

「楽しそうだと思うわ」

その場に居た精霊達が口々に賛成し始めた。グノーだけでなく皆乗り気だ。食い付きいいなあ。そんなにツボにハマったのだろうか。顔を輝かせた精霊達はわいわいと詰め寄ってくる。

「トーゴ、モンスターとは具体的にどんな」「トーゴ、お宝って宝石とか武器」「トーゴ、ダンジョンの灯は人工の」「トーゴ、入場料って」「トーゴ、どのあたりに」「トーゴ、」「トー」「うるせえ。

「待て。俺は聖徳太子じゃない。質問は順番に頼む」

「聖徳太子？」

「あれだよ。トーゴの世界のエロい人」

「偉い人ね」

「どっちでも良く無い？紙一重だしさ」

マジで？ 紙一重なのか。

その後も皆でダンジョンに着いてガヤガヤと相談し、三日三晩かけた結果ホログラムは十層構造になり補足データがみっちり書き込まれていた。

精霊は皆長生きで経験抱負だから、必然的にダンジョンの構造やモンスターの種類もバリエーションに富んだ物になる。それでもま

あコンセプトはダンジョンだから、結局俺の記憶にあるダンジョンとさして変わらない出来栄えになっていた。

それでもダンジョンを知らない精霊達にとっては非常に刺激的だ。恐らく人間にとっても。

精霊の里で他にもダンジョン作り興味がある奴はいないかとメンバーを募った所、六名が名を連ねた。

俺こと灰色の精霊トーゴ。

青い精霊の湖で眠っていた女精霊ディーネ。

緑のお隣のキノコに住む女精霊シルフィ。

茶色の髭が似合いそうな渋い男精霊グノー。

赤い戦いを観戦するのが好きだという男精霊マンド。

白く五メートルはあるうかという巨体の女精霊レイラ。

言わずと知れた賢鼠ジングルス。

総勢六名の精霊と一匹がダンジョン創りに出発する事になった。

一番歳がいつているらしいレイラがホログラムのデータを調べて必要なレジステル量を計算した所、六名全員がギリギリまで精霊石を吐き出してようやく必要量の半分だという事だった。どんだけだよダンジョン経営。

足りない分は精霊の湖のレジステルを持って行く事にする。キラキラしたレジステルの砂を袋に詰め、各々背負って善は急げと出発した。俺は空を駆けるジングルスに乗って一番小さな袋を担いでいる。なんかサンタの集団みたいだ。まあ夢を運ぶって意味では正しい。

俺は上手い事言ったと内心自画自賛しつつ、仲間と共に人間達がいる土地を目指して精霊の里を離れて行った。

迷宮計画（後書き）

ダンジョンものにはなりません。

シルフィ……シルフィード（風）
ディーネ……ウンディーネ（水）
グノー……グノーム（土）
マンダ……サラマンダー（火）

溪谷に行く

精霊の里がある森は人間の生活圏からべらばーに離れている。深く長い溪谷を越え、寒暖の差が激しく果てしない砂漠を経てようやく人間の国の端に出ると言う。

で、俺達迷宮開拓団は数日徹夜で飛び続け精霊の森を抜け、大溪谷に差し掛かっていた。空間転移ができればいいんだが精霊に魔法は効かないしそもそもレジステルを輸送しているのだ。えっちらおっちら地道に飛ぶしかない。

「にしてもでつかいなあ。グランドキャニオンみたいだ」

「なにそれ」

「前の世界にあったドでかい溪谷」

シルフィにグランドキャニオンの説明をしつつジングルスの背から下を見下ろすと、深い溪谷の底を蛇行して流れる河が見えた。現在進行形で大地を削り取っている河は千メートルは下を流れている様に見える。むき出しの赤みがかかった岩肌にはポツリポツリと木がたくましく根を張り枝を広げている。いいねえ、雄大な自然って心惹かれるわ。

そしてそんな大自然が創り上げた溪谷にはびょうびょうと強い風が吹きすさび、それに乗って色とりどりのドラゴンが飛んでいた。黒とか白とか青とか赤とか、鱗の色が違えば尻尾の形や翼の形状もいろいろ。ドラゴン博覧会か。

ドラゴン。ファンタジーの代名詞。思えばバリバリのファンタジー世界にファンタジーの塊な転生をしてきたってのに今までドラゴンを見た事は無かった。呆れるわ。

かたまっつてわいわい喋りながら飛ぶ俺達の一団に一匹の……一頭の？……どっちでもいいや。一匹のドラゴンが寄ってきて、ゴツい爬虫類顔に強い好奇心を浮かべ鼻でレジステルを詰めた袋を押してくる。

「こらっ！」

一際強く押されたシルフィが叱ってぺそんとドラゴンの額に平手を見舞うと、ドラゴンはあるからさまにテンパってヒヨヒヨと細い声で鳴きながら離れていった。意外と鳴き声が可愛い。

「ドラゴンって喋らないんだっけか」

「喋る奴もいるけどこの辺のは喋らないねー」

「なんだつまらない」

「喋らせてみる？」

「いやいや、自分から話しかけてくる所に意味があるのだよ」

「ふーん」

凶暴なドラゴンも良いけど叡智の龍も良くね？

それから時折ドラゴンが群を離れて寄って来たが、同じ様なやり取りで逃げていく。

ファンタジーの例に漏れず精霊以外だと最強種らしいドラゴンも精霊の前では単なる空飛ぶ爬虫類だ。バカス力ほとんど無限に魔法をぶっ放し、絶対不壊で（意思を持つレジステルⅡ精霊は物理的に破壊できない）、食べても消化できず、魔法耐性マックスな精霊を襲う種族はこの世界に存在しない。襲われても一瞬で返り討ちだし。超厨二生物、それが精霊だ。老いず死なず無敵とか馬鹿じゃなかるか。あ、やべ、自分を馬鹿って言うっちゃったぜ。

いちいち追い払うのが面倒臭くなったシルフィが性懲りもなく寄って来た一匹体格の良い深緑の鱗のドラゴンにお願いしてみんなで背中に乗せてもらう。しばらく自動輸送。こいつあ楽だ。

俺はドラゴンの頭の上に陣取り、角を操縦幹に見立て童心に帰ってブーンとかやっていたが、前方に変なドラゴンを見つけた。

いやドラゴン自体は何も変じゃない。普通の茶色っぽいスタンダードな西洋竜だ。

でもさ、ドラゴンの背中の上で鎖鎌を肩にひっかけて雑誌読んでる半透明のスーツの人、あれは死神さんに見えるんだけどどういう事なの。

「ちょ、みんなみんな」

手招きして呼ぶと皆がおしゃべりを止めてなんだどうしたと前の方に来た。頭に重量が集中したドラゴンが嫌そうに鳴く。ごめんね！

「あれ見える？ 茶色いドラゴンの上にいる半透明の人」

「見える」

グノーは首を横に振る。

「見えんなあ」

マンダは目を細めているが見えないらしい。

「分かんない」

シルフィは俺の頭に顎を乗せて言った。

「半透明って人じゃなくないかしら。見えないわ」

もつともな事を言うレイラも見えない、と。

「以下略」

おい略すなディーネ。

とにかく全員見えないっぽい。本物の死神だ。この世界にもいたのか。精霊の里で死者が出る事は無いから今まで気付かなかった。

あのスーツは全死神共通なのかなとどうでも良い事を考えているとディーネがハッと閃いた様に言った。

「え？ って事はあそこに今死神さんがいるの？」

「いるいる」

「ふうーん。見たいけど見えないのは仕方無いかな。トーゴ、転生代おごつて貰った御礼言いに行つて来たら？」

「いや、あれは俺を転生させてくれた死神さんとは別人」

あの死神よりスーツがパリッとしてるし。草刈り鎌じゃなくて鎖鎌だし。そもそも女だし。キャリアアウーマンっぽい。

「へえ、死神にも色々いるんだねー」

「俺も見たいなあ」

「無理だ無理、さつきから不可視看破の魔法フルで使ってるが全然見えん」

「トーゴにしか見えないって事？」

「トーゴいーな」

わいわい騒ぐ精霊達に気付いたのか、死神さんが雑誌から顔を上げて振り返る。

クイツと人指し指で眼鏡のつるを押し上げてこちらを見た死神さんに俺はぶんぶんと手を振った。死神さん怪訝そうな顔をする。

「ちよつと話してくる」

俺は側で待機していたジングルスに飛び乗り、茶色いドラゴンに向かつて駆けた。

宙を駆けるネズミに乗った精霊に驚いたドラゴンがびくつと身体を震わせるが、魔法で害意は無い事を伝えたと安心して悠々と飛行を続行する。

でも死神さんがいるって事はもうすぐ死ぬんだよね。なむなむ。

「こんにちは」

死神さんの正面に着地し、ジングルスから降りて挨拶すると少し驚いた顔をされた。

「これは珍しい。私が見えるのですか」

「見えますよ。前世から死者を見る目が引き継がれたみたいで」

「前世？……失礼ですが貴方の——前世のお名前は？」

「鈴木藤吾ですけど」

死神さんはなるほど、と呟いて納得する。なんだ。何かなるほどなんだ。

よっぽど俺が不思議そうな顔をしていたのか、死神さんは肩をすくめて説明してくれた。

「貴方に徳貨幣を譲渡した死神は私の同僚でして、貴方の話は伺っていたのですよ。記憶を保持して転生する者は全次元世界で見ても極少数ですから、このあたりの次元の死神の間では比較的有名です」

「え、俺有名人なんですか」

「はい」

知らない間に俺の存在が超グローバルになっていた。次元単位で有名ってお前……死神限定だけどさ……

何か恥ずかしいというかムズムズすると言うか、そんな感覚にも
ぞもぞしつつも、それからしばらく（茶色いドラゴンの死亡時刻に
なるまで）死神さんと雑談に花を咲かせた。

親方！墓場に男の子が！（前書き）

初めて予約投稿機能使った。とりあえず二話分予約、そして多分この勢いのまま五月中に完結する

親方！墓場に男の子が！

死神さんはドラゴンの魂を刈ると、

「では次の仕事がありますので私はこれで」

「あ、そうですか？またいつか話をしましょう」

「縁起でもない」

という会話の後ふつと消えていなくなった。

絶命して落下していくドラゴンを別のドラゴンが空中キャッチし、飛び去っていく。レイラによるとドラゴンの墓場に捨てられるらしい。ドラゴンの墓場……なにそれ胸熱。

「ちよつと墓場見物行ってくる。シルフィ、レジステルよろしく」

「いいけど先行ってるよー？」

「俺も久しぶりに行くか。シルフィ、レジステル頼む」

「あ、じゃあ私もー。シルフィ、レジステルお願いね」

「ちよつとなんで私にばかり押し付けるの？レイラ、グノー、手伝って」

「はいはい」

「だが断らない」

レジステルをドラゴンの背に置き、ディーネとマンダと一緒にドラゴンの死体を運んでいくドラゴンを追う。興味があれば何にでも首を突っ込む、それが精霊クオリティ。

道中マンダが語った所によると、ドラゴンの墓場は神聖な場所なのだそうだ。

ドラゴンは精霊の次に強大な魔法生物で、死体から入手できる骨や皮や牙は人間の手によって強力な武具や美しい工芸品になる。しかしドラゴンにとってはそれが猛烈に気に食わない。人間だって人間の皮でできたタペストリーや人間の骨でできた鎧を見て良い気分はしないだろうさ。

んで何千年前からドラゴンの死体は同族が出来る限り回収して

墓場に持つて行く事にしたんだと。時々人間が墓荒らしに来るが大抵墓守ドラゴンにズタズタにされているとのこと。

「そんな場所に入つて大丈夫か」

「大丈夫だ、問題無い」

「精霊だからね」

精霊ばねえ。ネタの侵食度もばねえ。

だらだら喋りながら飛んでいると、前方のドラゴンが下降し始めた。下に見えるのは大渓谷からほど近い岩山で、草一本生えていないゴツゴツした岩肌を晒している。岩山の周りにはぐると巨大な白蛇もと龍が取り囲みとぐろを巻き、片目が潰れた頭を俺達に向け鎌首をもたげていた。なんだこの龍デケエ。白いシェンロン？

中腹にぼつかりと口を開けた洞窟にドラゴンを追つて中に入ろうとすると、シェンロン（仮）が精霊語で声をかけてきた。

「ハカバのナカではオシズカニ」

「ヒヤア！ 喋つたあああ！ カタコトだけど！」

「セイレイゴはムズカシイのデス」

それだけ言つとシェンロン（仮）は頭を下に下げ小岩に寄せ、目を閉じる。入るなどは言わないのか。

「あれが墓守？」

「そう。五千歳ぐらいだったかしら？」

「六千だった気がするが」

「…… ヨンセンサンビヤク、デス」

「あらそう？ まあ誤差の範囲内よね」

俺達は好き勝手言いながら墓の中に入る。入れ違いにさっきのドラゴンが出てきて、俺達を見ると少し驚いた様子でキュルキュル鳴いてすれ違った。ちよつと可愛い。

洞窟は入つてすぐに巨大なすり鉢状の大空洞になっていて、天井に所々開いた裂け目から差し込む日の光に無数の骨が照らされていた。長い骨短い骨、大きな頭蓋骨小さな頭蓋骨、大剣が突き刺さった骨もある。なぜか宝石や金貨も転がっていた。なんで？

「ドラゴンの胃の中に入ってた物でしょうね。ドラゴンは光り物が好きだから」

「ほー。んじゃあの赤ん坊は？ 光ってないぞ」

「えっ」

「えっ」

「えっ？」

なんか小山を作っている骨の間に人間の赤子が落ちてた。天井へ向けて突き出したちんまい手しか見えないが、人間の手のように見える。

なんだなんだと覗きに行くとやっぱり人間だった。男の子、というか男の赤ん坊。

なにも身につけていないマツパの体。クリーム色の薄い髪。つぶらで真つ赤な目。そしてぴょこんと生えたウサミミ。兎人だった。

この世界の人間は兎人、竜人、魚人に分けられ、ひつくるめて人間と呼ぶ。兎人はウサミミ、竜人は肌に浮き出た鱗、魚人は下半身が魚なのが特徴だ。三種族はそれぞれ激しくいがみ合っているが割とどうでもいい。

今はそんな事より目の前の赤ん坊。こいつどこから入ってきた？

「迷子かしら？」

「ドラゴンの墓場のド真ん中か？ ありえないだろう」

「分からなければ調べればいい」

俺はジングルスがふりふり振る尻尾を手で捕まえようとしている赤子に魔法をかけた。どこから来たのかなつと。

魔法が発動すると、赤ん坊の頭上に高い城壁に囲まれた立派な西洋城のホログラムが展開された。赤ん坊はいきなり現れたホログラムにびつくりしたようだが、すぐに目を輝かせてホログラムを触ろうと手をばたばた振る。好奇心旺盛だ。

で、なにこの城？

「ディーネ、マンダ、これどこの城？」

「さあ？ 私は見たこと無いわ。最近できた城じゃないかしら」

「尖塔にハートの中にバツ印が入った旗—— 兎人の旗が立っている。兎人の城だろう」

「ふーん」

続けて魔法発動。この赤ん坊がこの城から墓場に来るまでの時間帯の情景を映し出す。

初めに映ったのは豪華なシャンデリアが目を引く石造りの一室だった。煌びやかなドレスに身を包んだウサミ女性が窓辺で赤ん坊を抱えてあやしている。その頭には小粒の—— 精霊石が嵌ったティアラが乗っていた。

なんだただの王族か。あれぐらいの大きさの精霊石を装飾品として身につける人間は王族しかない。らしい。

しばらく子守唄を歌っていた女性は不意に耳をぴくぴく動かし、困惑した表情で部屋のドアに顔を向けた。

次の瞬間爆炎と共に吹き飛ぶドア。血濡れの武器を手に雪崩れ込むぎらついた目の兵士。なにやら喚きながら切りかかってきた兵士は素早く状況に適応した女性の前蹴りを股間に喰らって悶絶した。うひゃあ、鎧の上から潰すって相当だぞ。

しかし撃退できたのは一人だけで、わらわらと湧いて出る兵士に多勢に無勢だと判断したのか女性は赤ん坊を大切に抱え込み、窓を突き破って外に飛び出した。おお力ッコイ。

……が、地上数階の高さからふわりと地面に降り立った女性は槍を構えた兵士に囲まれていた。代表格っぽい悪どい面したウサミミおっさんと二言三言言葉を交わし、女性は哀しげに微笑む。

突如七色に光るティアラと、呪文を唱える女性。女性が抱えていた赤ん坊が消えるのと女性の腹に槍が突き刺さるのは同時だった。そして映像が切り替わり、骨の山が映る。

……なるほど分かりやすい。

兎人の王城でクーデター↓せめて息子だけでも逃がさなければ！

↓緊急ランダム座標で転送↓ドラゴンの墓場に現れる、って流れか。

こんな辺境のこんな場所に飛ばされるとは運が良いのか悪いのか。まあかべのなかにいる！なんて事にならなかったのは幸運なんだろうなあ。

「うーん、厄介事の香りがするわねー。ワクワクするわ」

「クーデター。生き残った王族。辺境の地、ドラゴンの墓場にて精霊と出会う。素晴らしいな」

テンションを上げる二人を尻目に、再びひゅんひゅん動くジングルの尻尾を捕まえようと手をめちゃくちゃに動かしている赤ん坊に聞いてみる。

「なあ、ママのところに帰りたいか？ 殺されてる気配濃厚だけどさ、帰りたいなら転送してやる」

赤ん坊は尻尾を追う手を止めキョトンと俺を見て言った。

「やー！」

「え、嫌？」

「やー！」

「あ、そう」

聞かれた事の意味が分かったのかは怪しいが拒否されたので止めておく。まあ避難させるために転送したっぽいのに送り返したら虐めだよなあ。

「どうしようか。放置したら餓死かドラゴンに見つかってズタズタにされるか」

「いつそ一緒に連れてつたらどうかしら？」

「俺は賛成だ。面白そうだしな」

「だあー！」

「じゃ、全会一致で」

サラッと決まった。精霊の保護、即ち世界一安全。赤ん坊のママさんも浮かばれるだろう。

遠隔魔法でママさんを生き返らせてここに呼び寄せるのも一応可能だが、精霊のしきたりに反するので止めておく。別に破ってもペナルティーも何も無いが、しきたり破りは精霊が毛嫌いする「嘘」

に近いものがあり身体が拒絶する。

「あー」

「ジングルスの尻尾が気に入ってるみたいねー。この人間が喋ってるのって人間語？」

「多分な。ほとんどまっさらのようだが」

「まっさらとな？ それなら精霊語教えてみるか……リピートアフタミー。精霊」

「せえれー？」

「ノウ。精霊」

「せいれー」

「ノンノン。精霊」

「うあー……せいれい！」

「グッド！」

褒めると赤子が丸っこい顔を輝かせてきゃらきゃら笑った。

「わあ、なにこれちょっと面白いわねー。さあ言ってごらん私の名前。ディーネ」

「いーね！」

「ディーネ」

「いーね！」

「ディーネ」

「うー……いーね！」

「（´・ω・´）」

「お前の名前は難しいんだろう。さあ俺の名を呼べ。マンダ」

「まんた！」

「俺はオニイトマキエイじゃない。マンダ」

「おにいとまきえい！」

「（´・ω・´）」

狙ってやってるのか素なのか。俺達はしばらく赤ん坊に名前を言わせるのに熱中した。

親方！墓場に男の子が！（後書き）

精霊魔法と書いてなんでもありと読む

兎人↓（・×・）

精霊指定都市

赤ん坊の名前を魔法で調べたら命名の儀とやらが済んでおらず無名だったので勝手に名付けた。

命名、アレクセイ。名付け親、レイラ。八千年ほど前にレイラが契約していた兎人の勇者の名前だとか。

アレクセイ略してアレクはたちまち精霊ダンジョン部隊の間で人氣者になった。

渓谷を抜けたら砂漠を越えて十日ほどで目的地に着くはずがアレクに構いまくったせいで二ヶ月もかかってしまったほどだ。

兎人は離乳が早く既に野菜を食べれたためサボテンの実を食べさせてみたりオアシスの果物をジュースにして飲ませてみたり渓谷にとって返してフォレストドラゴンの背中に生えた究極の栄養食と言われる木の実をもいで食べさせたり。

はたまた格言に従い千尋の谷に突き落としてみたり（上手いこと次々と木の枝に引っ掛かって奇跡的にほぼ無傷だった）、凶暴な肉食獣の前に置き去りにしてみたり（アレクを気に入ったらしく巢に持ち帰って育て始めた、勿論取り返した）、そのあたりを飛んでたフェニックスの羽を貰って服を作ってあげたり（体の成長に合わせて丈が変わる）。

基本的に猫可愛がりしつつ思い出したようにむちゃくちゃをやっている内にアレクはぐんぐん成長し、見た目三歳ほどの幼児になっていた。ただでさえ成長が早い兎人を栄養状態最高で育てた結果だ。まあ多少魔法で成長を促進させたというのもある。夜泣きがうるさかったから。

「トーゴ、ここがせいれいしていいし？」

「らしい」

右肩にジングルスを乗せ左肩に俺を乗せたアレクはふーん、と言って街の入り口に降り立った俺達を見て大騒ぎしている市民を面白

そうに眺めた。

精霊指定都市は精霊の里へ続く砂漠の渓谷と反対側の入り口にある精霊と人間の出会いの街だ。

さて、この世界では魔法を使う動物を魔法生物と呼ぶ。彼等は体内でレジステルを精製し、固有の魔法を使う。フェアリーならテレパシー、ドラゴンなら飛行+α。その魔法行使に呪文も訓練も要らず、精霊の様に感覚的に使っている。

対して人間の魔法は精霊と同じくなんでもできる。しかし七面倒な呪文が必要で、加えて人間は自力でレジステルを精製できない上に魔法効率も悪いし威力も低い。

そこで精霊は面白そうな人間にまわりつく代わりに、人間にお願いされた魔法を使ってあげたり自分のレジステルを使わせてあげたりする訳だ。ギブアンドテイク。これを精霊契約と言う。

この契約により精霊は面白いモノが間近で見れるし、人間は強力な魔法がホイホイ使える様になる。代償として嘘つけなくなるけどな！精霊は嘘が大嫌いだから、嘘ついた瞬間契約破棄。精霊によっては去り際に呪っていたりもする。

ところが精霊はなんでもできるため、人間の頼みを全部聞くととんでもない事になる。俺を世界の王にしてくれ！とか敵国の人間は皆殺し！とか。とんでもねーです。

なんでもかんでも魔法で一発解決しても精霊としても面白くないし、言い方は悪いが人間が知恵を絞って四苦八苦するのを見るのが面白いのだから、精霊は人間のために使う魔法に制限をつけた。

死者蘇生は受け付けない、不老化はいいけど不死化はダメ、行使属性と威力の限定など。

行使属性の限定というのは大体そのままの意味で、人間のために使ってあげる魔法の種類を限定するのだ。例えばマANDAなら炎系統、ディーネなら水系統。マANDAに水を出してと頼んでも拒否されるし、ディーネに火をつけてと頼んでも拒否される。

そして精霊は限られた手札を有効に使おうと奮闘する人間を眺め

てニヤニヤするという寸法。

話が長くなつたが、精霊指定都市はつまりそういう契約を行う街なのだ。我こそはと思う人間はこの街に集まり、街の真ん中の広場で祈りを捧げる。精霊は里から出てくるとまずこの街に立ち寄り、面白そうな人間を見繕う。

ちなみに街の中では一切の争いが禁じられている。……破つたらどうなるかつて？

ハッハッハ。

勿論精霊はかなり好き勝手する存在だからこの街以外で契約する事もあるが、歴史的統計を見れば契約数はこの街が群を抜いている。それでも六人もの精霊が一度にやってくるというのは珍しく、俺達を遠巻きにしてざわ……ざわ……としていた。

群集の構成は兎人、竜人が半々ぐらいで、水を張った樽に車輪をつけた乗り物に乗っている魚人が若干名。いがみ合っている三種族もこの街では休戦状態、表面上はなんでもなさそうな顔をしている。しかし兎人と肩が接触した竜人は肩を手で拭って民家の壁にこすりつけていた。小学生かお前は。

ちよつとボーっとしてると代表者らしき小柄なウサミミが前に出てきた。

……ウサミミ美少女想像した奴はちよつと反省しろ。

いいか？

人間つてのは雌より雄の数が多いものなんだ。

つまりだね、普段そのへんで見かける兎人は、

ゴルゴにウサミミつけた様な渋いオツさんとか、アンゴラウサギを擬人化したようなでっぷり太ったオツさんとか、背骨もウサミミも直角に折れ曲がって杖つきながらぶるぶるしてるお爺さんとか、そんな連中。

現実ッ……！　これが現実ッ……！！

んで、小柄でしわくちな爺さんが話し掛けてくる。

「えー、精れいあまどもにおーれましてあ本日おまぬきあんがとさ

ん

「精

「靈

「語

「で

「お

「k

「このおじさん、なにをふがふがいつてるの？」

「ちゅー？」

文が支離滅裂な上に訛りが酷過ぎて意味不明。爺さんは俺達の反応にしょんもりとウサミミをうなだれさせて言う。

「人間語を使っていただけじゃないでしょうか。こんまちいつたーる精れいごはくちやくちやなつてんねんな」

おお、今度は一文だけ流暢。I c a n ' t s p e a k E n g l i s h みたいなもんか。

「んー、でも私達ダンジョン創るよいらっしやい！ って宣伝しにきただけだしここで問答する意味あんまり無い気がするんだけど」

「確かに。念話魔法で一氣に告知するか？」

「そう言えばまだどこに創るか決めてないわね」

「指定都市の南に草原があった筈だ」

「ではそこにしましょう」

「了解、知らせる」

俺が集まった群集に念話で語りかけると一斉にびくう！ と震えた後数秒沈黙し、すぐにヒソヒソ声で囁かれはじめざわめきが大きくなつていった。

これでよし。

「トーゴ、ぼくはどうすればいいの？」

「ああ、しばらく街を見て回るといい。ダンジョン創りは二、三日かかるから、終わったら呼びにくる。ジングルスはどうする？ 一緒に来るか？」

「ちゅう」

否定。

「アレクの方にいるか？」

「……………」

肯定。俺よりアレクの方がいいのか。ちょっと悲しい……

「分かった、それじゃこれ換金用な」

俺はビーズ程度の大きさの精霊石を一粒アレクの手のひらに吐き出す。これだけあれば屋敷の一軒二軒建つくらいの金にはなるだろう。アレクはそれを大切に握りしめ首を傾げた。

「ありがと。でもかんきんってなに？」

「お金に替える事。お金の概念は教えただろ」

「うん。がいねんってなに？」

「物事の総括的意味のこと」

「そうかつってなに？」

「全体をとりまとめて締めくくる事。……なにこのエンドレス」

「えんどれすってなに？」

やかましい。

キリが無いのでグノーの肩に飛び移りながら適当になんとかしとけ、と言うと、アレクは素直にうんわかった、と答えた。

精霊の無茶振りに応えて育ったアレクはニコニコ笑ってダンジョン建設場所に向かうためにふわりと浮いた俺達にぶんぶか手を振る。俺達も手を振り返してから飛び去った。

早熟とは言え一歳にもなっていない子供を一人にするのは危ない気もしたが、まージングルスいるし魔法使えるし大丈夫だろう。

……
多分。

精霊指定都市（後書き）

「精れいあまどもにおーれましてあ本日おまぬきあんがとさん」
「精霊様共におかれましては本日お招きありがとうございます」精霊様、この街に来て頂き感謝致します

「こんまちいつたーる精れいごはくちゃくちゃなつてんねんな」
この街に伝わる精霊語はくちゃくちゃになつてんねんな」この街に伝わり（私が習得している）精霊語は発音も文法も支離滅裂になつています

ダンジョンメイキング

なにやら大騒ぎになっている街を後にして、俺達は南の草原に降り立った。吹き抜ける風にざわめく緑の絨毯はなだらかな丘の向こうまで続いている。

俺達は誰ともなく頷き合い作業に入った。

「そおい！」

まずは俺が気合いを入れて真下に掘削魔法を放つ。地響きを立て不可視の超巨大ドリルが土を巻き上げぐんぐん掘り進み、一分ほどで停止した。円形の底無し穴の縁を更に削り五百メートル四方の正方形にして基礎は出来上がり。

「ぬーん！」

グノーが穴の側面と底に永久硬化魔法をかけ、

「よいしょと」

ディーネが掘り上げた土を少し使い十階層に区切りこれまた硬化をかける。

余った土はダンジョンの地上の横に円柱形に積んで塔にした。勿論硬化をかける。塔はビギナーダンジョンにする予定。

グノー、シルフィ、ディーネ、レイラがレジステルを担いでいそいそとばかり口を開けたダンジョンの入り口に潜っていくのを横目に俺は一抱えのレジステルを持って塔に入る。

「さて」

がらんどうの塔の入り口で、上を見上げる。ビギナーダンジョンだから迷路はやめておくと決めてある。あくまでもここはダンジョンシステムとモンスターとの戦闘に慣れてもらうための塔だ。

まずはこの薄暗さをどげんかせんといかん。適当な間隔で採光窓を開けて、と……あー、やっぱり大規模な魔法連発したせいでマステルが増えて魔法効率落ちてる。効率落ちても量で補えるからいいんだけどさ。魔法効率低下を見越してレジステル多めに持ってきた訳

だし。

次は塔の内側の壁に沿ってつぺんまで緩やかな螺旋階段を作る。幅は三メートル程度。そしてつぺんに塔の頂上部分を丸ごと使った大部屋を作る。ぶっちゃけボス部屋だ。

うむ、大枠完成。ここからが面倒な所。

初心者用だからトラップも無ければ宝箱も無い訳だけど、モンスターは必要。当然だ。

従って疑似生命体／スライムを創造。うおおお燃え上がれ俺の妄想！

ありったけの妄想とアツい何かを込めて魔法を使うと、虚空からモロンと一匹のスライムが零れ落ちた。

半透明のぷよぷよした身体と、その中心部に透けて見えるビー球ぐらいの大きさの黒い核。全長は大型犬程度？ 未だに手のひらサイズな俺からしてみると見上げるほどでかい。メインダジョン一階にも同じモンスターを配置するが、そっちは嫌がらせ度を上げるために牛乳で汚れて数日経った雑巾の臭いをさせる予定。うひひ。

俺はプルプルしているスライムに人間を襲う様に魔法をかけた。

攻撃方法はスライム体当たりとスライム触手（一本）。脅威度としては動きの鈍い人間の大人ぐらい、倒すのは難しくない。

でも体当たりで階段から突き落とされたら墜落死するよね。手すりどころか柵も無いし。

俺はもったんもったんゆっくり上下に伸縮しながら階段を登っていくスライムの後ろについていきながら塔の壁にスライム発生ポイントを作成していく。何の変哲も無いからスライムがむにと染み出してくる光景はちよつと面白かった。

どいつもこいつも元となるスライムのデータをコピーしただけなので姿に差異は無い。色違い差分でキャラ数を稼ぐのはメインダジョンだけだ。

ちなみにスライムの身体材料は塔の壁が変化したものだ。倒されると核だけ残して塔の壁に吸い込まれる。

塔内部のスライム数が一定の範囲内で変動するように設定したり、スライムが塔の外に出ないように設定したり、魚人用の水場を所々に設置したりしつつ階段を登っていく。塔そのものにレジスデル精製機能を付与してあるので一度創れば何度も魔法をかける必要が無いのが嬉しい。

大体塔の機能を整備し終わった所でてっぺんの大部屋に着いた。そこにはスライムはおらず、天窓から差し込む光が部屋の中央をスポットライトの様に照らしていた。

俺はそこにスライムキングを創造した。アフリカ像ぐらいの図体で、通常のスライムよりも若干動きが早く、五本に増えた触手がいやらしい。触手の先端からは無機物のみを溶かす不思議強酸が出る。この部屋に入れるのは一人だけで、ボスとの一騎打ちを行う。勝てば宝箱をゲット、負ければ死あるのみ。殺伐とした、命のやりとりの世界。

ただし裏技として降参すると無数の触手であんな事やこんな事をされた後にダンジョン入口に強制送還される仕組みになっている。このアイデアを出したのはグノー。渋い顔してる割になかなかやりおる。

えーと倒されたボスは一日で復活するようにして、ボスドロップの宝箱の中身は武器か宝石で、ボスを倒すと倒した人間はもう初心者塔に入れなくなる仕掛けにして（強い人間が独占してボス狩りするのを防ぐため）。

他になんかあったかな？ 不具合があれば後で直せばいいとは言え出来る所はしっかりやっておきたい。

…… あっ、核の補充があつた。

モンスターは倒されると核を落とす。スライムの場合は丸見えになつてアレの事。この核を集めてダンジョンの各階層に設置された祭壇に捧げると褒賞を受け取れる仕組みだ。より深い階層でより質の良い核をより多く捧げるほど褒賞の質は良くなる。

一番低いランクが無意味にまん丸な石ころから始まって、黒パン、

酒、風邪薬、ギターやら安眠枕やら、交換品目は多岐に渡り、ダンジョン管理役の精霊が気が向いた時に更新されていく。

一番下の階層で質のいい核を捧げれば、万病を治し頑健な肉体に作り替える霊薬とか、一度だけ身代わりになって死んでくれる藁人形とか、若返りの薬とか、城とか、そんなものが手に入る。ラスボスの核を捧げれば肉体にレジステル精製機能を付与したり死者蘇生したりもできる。ダンジョンの褒賞ならなんでもアリというのが精霊の新しい共通認識だった。

まーラスボスは一撃で山一つ消し飛ばすような奴にする予定だし、初のダンジョン制覇者がでるのはさて何百年後か何千年後か。ダンジョン内では精霊契約が一時解除されるから自前の魔法でなんとかせにゃならんのがネックだろう。

ダンジョン創造部隊のトトカルチョだと最短でシルフィの十年。

大穴狙い過ぎだろ、二番目がレイラの三百年だぜ？

……あれ、何をしようとしてたんだったか……ああそうだ核の補充だ。核も塔の壁から生成される訳だから、人間が核を持ち帰ると塔の壁が薄くなっていく。核を捧げれてくれりゃあその分を回収して補填もできるが、人間が記念品としてとっておいたりダンジョン外で紛失したりと回収漏れも出るだろう。

まあ適当に塔周りの土と空気中の炭素で補充するようにすればいいか。精霊のほとんど念じるだけで何でもできるご都合主義も甚だしい魔法にかかれば無から創るのも余裕だが、ベースになる物質があつた方が効率がいい。

さあこれで全部終わった。塔の内部はもはやマステルだらけ。

ああ、残り日数ひたすら深呼吸してレジステルを吸収する作業がはじまるお……

暇だから壁面に手作業でレリーフでも彫っていよう。

ダンジョンメイキング（後書き）

精霊は深呼吸するとレジステル吸収効率が劇的に上昇します

精霊マジ精霊

精霊の愛し子

トーゴがだらだらと塔の壁に下手くそなレリーフを彫り、他5人の精霊が嬉々としてダンジョンに悪辣なトラップを仕掛けている時間軸から遡る事数時間、精霊達がダンジョン建設予定地に移動している頃。

アレクはレジステルを両替するどころかそもそも言葉が通じず困っていた。

精霊が一方的な告知をするだけして去り、後に残されたアレクは当然取り囲まれ質問責めにあう。

なぜ精霊と一緒にいたのか？

兎人のようだが何者だ？

あんな精霊で大丈夫か？

肩のネズミはなんだ？

その紅と金の服はまさか不死鳥の？

どれもこれも人間語。精霊達に精霊語は仕込まれても人間語には生まれてから王城にいた数日間しか触れていないアレクに理解しろというのは無理な話で、質問の嵐も何かぴーちくぱーちく言ってるな、としか分からない。

精霊語を話す老兎人が通訳をしようとしたが訛り過ぎて全く理解出来なかった。仕方がないのでアレクは人間流魔法を使う事にする。「えーとほんやくまほうはせいれいごで『ほんやくせよ』だから、じゅもんになおすと……」

ウサ耳をしておれさせて当惑していたアレクがいきなりぶつぶつ言い始めたので群集はますますざわめいた。

人間はその昔、魔法を使う事が出来なかった。人間に魔法を与えたのは精霊で、故にその呪文も精霊語がベースになっている。精霊語を知り、呪文への変換法則を知れば人間もあらゆる魔法を使う事ができるのだ。

が、そもそも精霊語の習得が難しい。数千歳の知能あるドラゴンでさえ発音がたどしくなるほどだ。そんな言語をアレクがたった二ヶ月で基礎だけとは言え習得できたのは、魔法で無理やり学習能力を高められていたというのもあるが、本人の類い希なる資質によるところが大きかった。

更に精霊語・呪文の変換法則が人間の間で失伝してから久しく、新たな魔法は古代の遺跡から発掘する他無い。その遺跡の発掘権をめぐってまた種族間で争いが起きているのだがそれは置いておくとして。

つまるところ、アレクがした「その場で呪文を作る」という行為は異常だったのだ。傍目には何を呟いているか分からないため異常性を知られる事はなかったが……

「00010010000011000010（翻訳せよ）」

紡がれた呪文、不死鳥の服に含まれたレジステルとマナの合成による魔力発生、それが組み合わせり魔法が発動した。柔らかで神々しい魔法発動光と共にアレクの理が一時的に書き換えられ言語万能状態になる。

驚き戸惑い警戒する群集にアレクは手のひらに乗せたレジステルを突き出し言った。

「えーと、このレジステルをかんきんしたいんですけど」

「！いきなり人間語を……こ、これは翻訳魔法！」

「知っているのか町長！」

「古代、兎人が操ったという万能翻訳魔法じゃ。専ら兎人と精霊の言葉の壁を取り除くために使われ、亜種として知能無き獣共の鳴き声を解する呪文も存在したと云う。永き時の流れと共に失われたとされておったが……おお……まさかこの目で見よう日が来るとは！」

「おい待てそれは魚人の伝承だろうが勝手に兎人にすぐ替えてんじやねーよ肺に直接海水ぶちこんで溺死させんぞコラア」

「あなた達何寝言吐いてるの？　そもその魔法の始まりは竜人なのよ？　当然翻訳魔法を使っていたのも竜人に決まって——」

「出たよ竜人お得意の上から目線歴史捏造、ちったあ兎人の謙虚さを見習——」

「……ねー、かんきんは？」

「おおすまんすまん。こつちへおいで、魔具屋へ連れて行ってあげよう」

アレクは三つに分かれ言い争いを始めた群集を尻目に老兎人について魔具屋へ向かった。

アレクはほとんど初めて生で見る人間の街に興味津々だった。あつちへふらふらこつちへふらふらするたびに肩のジングルスが尻尾で頬を叩いて正気に戻す。

精霊指定都市は歴史ある街だった。その歴史は七千年とも八千年とも言われていて、ただの一度も戦火にみまわれた事の無い完全中立都市でもある。

ならば昔ながらの家屋が残っているかと言えばそうでもない。むしろ逆だ。ログハウスがあれば藁葺き屋根もあり、ちょっとした屋敷やら家より煙突の方が大きい珍妙な家、どっしりした赤煉瓦の邸宅、テント、改造馬車、統一性もへったくれも無いごちゃごちゃした街並みだった。しかし統一性は無いが活気はあり（先ほどの精霊の告知も原因だろうがそれを差し引いても）、辛気臭い顔をしている人間は一人もない。

精霊は面白いモノが好きだから、いつまでも変わり映えのしない街並みを残しているとガツカリされる。故に人間は精霊の興味を引こうと街にやってきてまず目にする家から趣向を凝らす事にしたのだ。精霊の関心を買えばそれだけ滞在期間も増え、自然に契約のチャンスも増える。

精霊指定都市は精霊契約の街であると同時に新しい文化や発明品が真っ先に持ち込まれ、また生み出される街であった。

アレクは物珍しい珍妙な街並み見て回って弄って回ってみたいけど仕方なかったが、まずはトーゴに言われた通り換金するために老兎人についていく。人間社会では何をするにも金が必要だ、という若

干偏った知識をアレクは持っていた。

「……ところで君、名前はなんと言うのかね？」

少し歩調を緩め、アレクの横に並んだ老兎人がおもむろに尋ねる。

「え？ ああ……アレクセイ。みんなはアレクってよぶ」

店の軒先に猿轡を噛まされ逆さまにぶら下げられているマンドレイクの恨めしげな目を見返ししながらアレクは上の空で答えた。

「ほう！ 古の勇者の名前か！ その魔法の見識、精霊語、名前負けはしとらんようじゃな。むしろ第二のアレクセイになるやもしれん」

「えー？ ばくメイドにワインかけられてしぬまぬけじゃないよ？」

「……まで。どういうことじゃ？ 勇者アレクセイがワインで死んだ？ 彼は魔王と相打ちになったんじやろうが」

「え？ アレクセイってまおうをあんさつしようとしてかえりうちにあつたひとじゃないの？ レイラがいつてたよ」

「……レイラとは極光の大精霊レイラの事かの？」

「たぶんそう。あ、だめだよジングルス！ そのナッツはおかねはらわないとかじつちゃだめ！ ……だよね、おじいさん。あれって『うりもの』なんだよね？ ……おじいさん？ おじいさーん」

アレクはシヨックを受けてへたり込んだ老兎人の目の前で手を降ったが、反応はなかった。

精霊は嘘をつかない。精霊の情報は全て真実だ。ならば精霊の教育を受けたと思しいアレクの言葉もまた真実であろう事は想像がつく。

歪められた歴史が精霊の何気ない一言によって正された例は古今東西数多いが、歪んでいたままの方良かった歴史中にはある。兎人が誇る勇者アレクセイの英雄譚の結末が、魔王城に姿を消してこそコソ忍び込み魔王を暗殺しようとした挙げ句に何も無い場所で転んだドジっ娘メイドが運んでいたワインを被って見つかかり抵抗虚しく圧殺された、という事実は正く知らない方が幸せだった。

幼い頃からの憧れを粉碎された老兎人はしばらく打ちひしがれて

いたが、やがてすつくと立ち上がり悟りきつた顔でアレクを促し歩き出した。何もなかった事にするらしい。

「それでアレクはいくつになるのかね？」

「わかんない。かぞえてないもん」

「……ふうむ」

老兎人はさりげなく横目でアレクを観察した。魚人や竜人と比較して兎人は成長が早い。外見年齢が他種族の三歳ならそれは兎人の生後六、七ヶ月に相当する。

……兎人族の王城で軍部の武装蜂起が起きたのが二ヶ月前、その際生まれたばかりの王子が行方不明になったと聞く。

老兎人は一瞬アレクがその王子ではないかと疑ったが、流石に成長が早過ぎるだろうと思いついた。兎人の王領に精霊が現れたという噂も聞かない。兎人の子供など山ほどいる。人違いだろう。

老兎人はただの無邪気な子供に見えるアレクにもこの歳であらして精霊と共にいた以上複雑な事情があるのだろう、とそれ以上聞くのを止めてしまった。

やがて二人は石造りの巨大サイコロの側面に窓とドアをつけたよ

うな面白みの無い建物、魔具屋に着いた。

魔具屋では基本的に魔法生物の素材を扱う。魔法生物は体内でレジステルを精製すると同時に、それを魔法として消費する部位を持つており、魔法生物の死後も魔法を発動する力はある。

そういった魔法生物の死骸から生活用品から兵器まで様々な道具を作り出し、売買するのが魔具屋だ。当然あらゆる魔具の根幹をなすレジステルの取引も行っている。

二人が魔法がかけてあるのかまるで重さが無い石のドアを開けると、薄暗い店内に整然と並んだ棚の奥、カウンターの向こうで本を読んでいた竜人が顔を上げた。右頬にうつすらと緑の鱗が浮き出た緑髪碧眼の妙齡の女性だった。

「あらいらっしやい、ご要望の品は？」

「今日は私ではない。この子がレジステルを売りたいそうじゃ」

「かんきんしにきました！」

カウンターにトテト駆け寄りレジステルを突き出すアレクの頭を店長は優しく撫で、一転老兎人を胡乱な目で見る。

「あんたこんな場末の怪しい店にこんな幼い子連れ込んで何考えてるの？」

「自分で言っている内は安心じゃろうて」

「私だつてばつたくる相手は選ぶわよ。もつと真つ当な店知ってるでしょう？ そっちに連れて行きなさい」

「なんじゃつれないのう。口八丁色仕掛けなんぞ使わんでも今回の取引は十分利益に」

「棺桶に片足突っ込んだ爺は黙ってなさい」

「いろじかけてなに？」

「坊やは知る必要の無い言葉よ」

シッシと手を振って追い払おうとする店主は、ふとアレクの手に乗ったレジステルに目を留めた。訝しげに目を細め、驚愕で目を見開き、呆然と呟く。

「ちよつとなによこの特大レジステルは……この子大貴族の子息か

何か？ 服の素材もよく見れば不死鳥の羽……」

店主はビーズ程度のレジステルを微かな畏れを込めて見る。物質に含まれているのでは無く、純粹にレジステルのみで構成されたレジステル、つまり精霊石でこの大きさ。この道で百年以上生きている店主でさえ見た事がなかった。

こんな大きさの精霊石をポンと出せるのはそれこそ――

そこまで考えた店主は気がついた。先ほどの精霊による一方的無差別告知。またぞろ精霊の気紛れか、商売の種になるといいが、と思っていたが、精霊指定都市のすぐ南にだんじょんとやらを創るという事は付近に精霊が来ている訳で。

そこに来て特大精霊石を持つ兎人の幼子（となぜかその肩に乗り後ろ足で顔を搔いているネズミ）、無関係とは思えない。

「ねえ、この子って」

「うむ。精霊が連れてきた子じゃ。精霊語を儂よりも遙かに巧み操り、失われた翻訳魔法を使う」

「なるほどね。さしずめ精霊の愛し子ってところ――きゃ!？」

その時突然地響きと共に地面が揺れた。店主は慌ててカウンターにしがみつき、老兎人は素早く頭を抱えて床に伏せ、ウサミミだけを盛んに動かしている。店内の棚に乗った瓶や骨や壺が一斉にガタガタ揺れて騒音を出す中、アレクは地震だ地震だー！ と叫びながら楽しそうにぴよんたん跳ねていた。

小刻みな揺れはしばらく続き、始まった時と同じ様に唐突に止まった。

店主は恐々カウンターから手を離し、老兎人も床に散乱した陶器や瓶の破片に気をつけながら恐々立ち上がる。笑顔なのはアレクだけだった。店主は店内の惨状を見て呆然とした。

「なによ今の揺れ……」

「ぼくしってるよ！ じしん！ きつとグノーかトーゴだよ！」

「グノーは分かるけど……トーゴ?」

「せいれいだよー」

「ああ……精霊……精霊ね……精霊なら仕方ないわね……」

「うむ、精霊なら仕方ない」

「しかたない！」

「ちゅー！」

精霊なら仕方なかった。

精霊の愛し子（後書き）

呪文の作り方の法則が分かった人はちよつと凄い

ダンジョンな日々

アレクは精霊が戻ってくるまでの間、魔具屋に居候する事になった。

精霊指定都市では争い事が禁じられているとは言え、口先三寸で丸め込まれて街の外に連れ出されてしまったらそこはもう無法地帯だ。手足が生えた状態で朝日を拝めるか保証はできない。同時に精霊のお気に入りて手を出した下手人が胴に首がついた状態で夜を越せるかも保証できなかったが、人間が後先考える者ばかりなら守衛やら警邏の仕事はもつと楽になっているだろう。

色々と犯罪スレスレの後ろめたい稼ぎ方をしている店主も精霊に無責任に育児放棄されたいたいけな幼子を見て憐憫の情が湧いたような気がしなくてもなく、なによりもアレクのレジステルに相応なだけの現金を用意する事ができなかったため、ベッドを貸す事で不足分の支払いとした。

ぶっちゃけボロ儲けもいい所だった。

店長は1ヶ月程度は十分遊び暮らせる金を渡しこれでいいかと聞くとアレクはあっさり頷いた。脇で見ていた老兎人は眉を顰めたが口出しはしなかった。

アホのように狂ったレートだったが別に店長はアレクを騙してはいない。嘘もついていない。ぼつたくただけである。

店長は実際の価値と支払額の差額で老後まで困らないだけの財産を得て、アレクは精霊が帰るまでの資金を得るという目的だけ見れば達成した。

みんな幸せ、めでたしめでたし。

それにしても数日の宿代としては過剰にもほどがある量のレジステルを渡して置いてきぼりにするあたり、精霊は過保護なのか放任なのか分らない。

アレクは毎日楽しげに外に遊びに行き、店に戻ってくるのは食事

と夜の時間くらいだった。精霊と共にあれだけ派手な登場をしたのだ、良い悪いに関わらず何かに巻き込まれる事になるのだろつなという店長の予想に反してアレク笑顔に一片の曇りも無く、平和そのものの。

アレクは天性の強運と人を惹き付ける才能があるらしく、コインを投げれば裏表を数十回連続で当て、街の同年代の魚人とも竜人ともすぐに仲良くなったようだった。当然魔法は使っていない。精霊に気に入られているのも納得だ。

精霊がやってきてから二日目、言いつけ通り素直に日が沈む前に帰ってきたアレクは狭い台所で包丁を振るう店長にとつとこ歩みよるとおもむるに聞いた。

「どうしてうじんとぎよじんとりゅうじんはながわるいの？ おねーさんはふつうなのに」

曰く、同じ種族同士で集まっているとみんな楽しそうなのに、違う種族が混ざると途端に嫌そうな顔になる、との事。

店長は嫌な顔で済むだけこの街はマシだと思ったが、それは口に出さなかった。

「うーん、簡単に言えば自分達こそ一番だと思っているから、かしらね。竜人は頑丈で、力が強くて長生き。魚人は脆い反面水中で暮らせるし、魔法が得意。兎人は成長が早く、身軽で俊敏。一長一短なのよ。でも優劣をつけたがるのよね……」

「みんなちがつてみんないい！」

「あら良い言葉」

「なかよくすればいいのにね。けんかばかりじゃおもしろくないよ」

「無理無理、もう差別的思考で凝り固まっているもの。自分で言うのもなんだけど私みたいな人間は珍しいわ。後はそうね、種族に伝わる伝説の違いも仲違いの原因かしら」

「でんせつ？」

「そう、伝説」

「どんなでんせつ？」

「どんな……ううん、例えば竜人族に伝わる伝説だと『原初、精霊在り。精霊は空を創り、大地を創り、海を創った。精霊は背中の翼を取り、空に投げた。すると精霊は魔法無しでは飛べなくなったが、代わりにドラゴンが空を舞う様になった。ドラゴンは精霊を真似て竜人を創り、世を支配させた。竜人は大地を豊かにするための手足として兎人を創り、海を豊かにするための手足として魚人を創り以下省略』なのよね。」

でも魚人族の伝説だと精霊がリヴァイアサンを創ってリヴァイアサンが魚人を創って云々、兎人族の伝説だと精霊がラビイを創ってラビイが兎人を創って云々。それぞれ自分達の伝説が正しいと言い張って聞かないのよ」

「……………ふーん」

「なに今の沈黙」

「いわないよ！ みんなにいつちやだめっていわれてるから」
店長はアレクの反応からなるほど真実は人間に伝わる伝承とは異なっているのか、と推察したがやはり口には出さなかった。

実のところ、時代を遡れば兎人も竜人も魚人も元々一つだった。トーゴがいた世界の様に鱗もひれもウサミミも無い、「人間」という単一種族だったのである。

今を去る事約一万年前、まだ魔法を使えなかった人間はしきりに魔法を使いたがった。空に憧れる様に、魔法に憧れた。しかしレジステルとマナの合成というプロセスが実行できない人間にはどう足掻いても魔法は使えない。

で、ある時人間が魔法使えないなら人間以外になりやあいんじやね？ というぶつとんだ発想で人体改造を始めた。

魔法生物を狩り、その血を飲んだり注射したり、皮膚を移植したり、臓器を移植したり、他にも記すもはばかられる事を色々。無茶な人体実験を続けたせいで実験を主導した同時の古代国家の人口は半減した。

しかしその甲斐あり、無数の魔法生物の中で奇跡的に人間に適合した種がその数、三。後の兎人と竜人と魚人だ。

そのままやった魔法使えるようになったよー、の流れならまあ良かったのだが、魔法生物の肉体が人間に適合する際に変質し、魔力は作れても魔法は使えない状態になってしまったのである。

人間は嘆いた。そりやもう嘆いた。魔力作れても魔法使えなきゃなんの意味もねーんだよと絶叫した。

そして散々非人道的な人体実験をした挙げ句にてへっ、失敗しちゃったとかほざいた国家では全土で溜まりに溜まっていた不満が爆発し暴動が起きる。

魔法は使えなくても身体能力が格段に上昇していた国側、つまり新人類はこれの鎮圧に乗り出すものの、新人類は数が少なく多勢に無勢。それでもなんとかかんとか互角に戦う事ができてしまったのが災いし、長引く戦乱により人間の人口は激減。更に放置された死体から死病が発生し、蔓延。旧人類、全滅。

旧人類よりも病への耐性が高かった新人類も種の存続が難しいレベルまで数が減る。既に戦乱と個体数の激減により人間文明は完膚なきまでに破壊されていた。

そこまで至つてようやく高みの見物を決め込んでいた精霊がやべえこりや人間滅ぶんじゃないかね、と危機感を抱き、動く。創造力豊かな人間を精霊は絶滅は困ると思う程度には気に入っていたのだ。

精霊は人間に呪文魔法を与え、復興を促す。人間は無事持ち直した。

最初の百年ほどは手を取り合っていた新人類もやがて日々の暮らしに余裕が出てくると容姿や能力の違いで差別が生まれ、溝が深まり、決裂。人間は種族ごとに分かれ住む様になり、長い歲月の内に架空の伝説が生まれていった。

最初は凄惨な歴史を隠すための方便だった伝説は語り継がれる内に話におひれがつきもつともらしくなり、今では真実として扱われている。

ちなみに精霊達が一樣に三種族の来歴について口を噤んでいるのは単にその方が面白そうだからだった。まさに精霊。

話しながら料理をしていた店長は何やらじっと考え込んでいるアレクに野菜スープをよそった深皿を渡しながら言った。

「ま、私は歴史学者じゃないからそのあたりはそれほど詳しく無いし興味も無いわね。さあご飯にしましょうか」

「ちゅ？」

「ジングルスはこっちのチーズね」

「ちゅーちゅちゅー！」

「え、なによこの猛烈な抗議は」

「それきのうとおなじチーズだよ。ちがうチーズがたべたいんじゃないかなー」

「食い道楽ネズミめ……」

ジングルスは褒められたと思ったのか自慢げに髭をぴくぴく動かした。

三日後、他の精霊がダンジョン開店準備をしている内にトーゴが街に戻った。それを魔具屋の前で若干恰幅が良くなったジングルスと見た目は変化の無いアレクが出迎える。

「おかえりー」

「おーただいま、ってジングルスが肥えてる……」

「トーゴもおつきになったね。ぼくとおなじくらいあるよ」

「あまあ結構レジステル吸ったからなあ。体格だけ大人だから不気味だろ……で、アレクは翻訳魔法使ってるのか」

「うん」

「解除してくれ。そっちの方が聞き取りやすい」

「わかった。えー、と……101011000011111101
0011010（翻訳解除）」

「あなたがトーゴ？」

「イエス！……ん？ あれ、人間が流暢に精霊語を、じゃないこれ翻訳魔法だ。失伝してなかったっけか」

「ぼくがおしえたんだよ！。だめだった？」

「なんてことしてくれたんだ！ 別に構わん！」

「……あの、喋っても？」

「どーぞ。何？」

「だんじょんとはなんでしよう？」

「……え？」

「いえ、だんじょんを創るから自由に来ていい、とは聞きましたが、具体的にそれがどんな物か分からず街の者のほとんどが行こうか行くまいか迷っているのです。アレクセイにも聞いたのですがどうも要領を得ず」

「……………しまった……………あー、解答拒否！ 楽しみにしているがいい、とだけ言っておこう！」

トーゴはアレクを抱えてジングルスを肩に乗せると、急いでチュートリアルクエストシステムを創りにダンジョンに飛んで戻る。精霊が知らない概念を人間が知っている訳がなかった。

なんとかチュートリアルシステムの導入が間に合い、精霊が精霊指定都市にやってきた三日後の正午に無事ダンジョンは解放された。初日の客入りは三十人弱。人間は皆精霊の建造物は何があるか分からないという警戒心から完全武装していて、初心者塔のスライムは片端から斧や鎚や麵棒で叩き潰され、スライムキングも大魔法一発でオーバーキルされてしまった。

夜になり、ダンジョンについておおそ把握し戦利品を手に意気揚々引き上げていく人間達をダンジョン最深部の一室に設置された水晶球で確認した精霊達は、額を寄せ合って相談する。

「……攻略速度早過ぎない？」

「初心者塔だからだろう？」

「にしてもさ、初心者塔の初クリアは三日ぐらいの見込みだったでしょ」

「そうね。もっと鬼畜仕様にするべきかしら」

「いやいやいや、今日は良い装備着て良い武器持った場数踏んでるっぽい人間が魔法を湯水の様に使ってたからこそこのスピード攻略。毎日あんな過剰戦力でやってたら採算がとれない。快進撃は三層ぐらいで止まると見た」

トーゴの言葉に全員なるほどと頷いた。三層からは二つの意味でいやらしいトラップが増え、モンスターが連携を始めるため進みに

くくなる。

「……でもそれ採算を無視すればいけるって事よね？」

ふと気付いたディーネの言葉に今度は全員沈黙した。

ややあつてダンジョン攻略トトカルチョで最短の十年に賭けているシルフィが得意気に言う。

「ふふふ……賭けは私の一人勝ちかな」

「させるか。俺は人間の弱さを信じる」

ちなみに賭けに勝っても特に何も無い。嬉しいだけ。

ダンジョン開店二日目、ぼくもやりたい！と駄々をこねダンジョンに潜ったアレクは、入っていきなり超低確率で発動する開幕落とし穴トラップに引つ掛かって一気に最下層まで落ちた。面食らうアレクの前にはおどろおどろしい漆黒のオーラを纏った剣を持つ骸骨がいて、物音に気付いて振り返る。

叩きつけられる濃厚な死の気配。さしものアレクも顔面を蒼白にしたが、後退り一步下げた足がちょうどランダム転送トラップを踏み、一層に送られた。

それを例によって最下層の部屋から水晶を通して見ていた俺達は大爆笑したが本人は笑い事ではなかったらしく、ダンジョンに潜り

たいとは言わなくなった。

股間がちょっと濡れていたのは黙っておいてやる事にした。

二日目は客入りが増え、五百人超の集団でお越しになった。全員がダンジョンに潜る訳ではないようで一割ほどはダンジョン入口付近で商魂逞しく露天を始めた。それでもダンジョンチャレンジャー……もう冒険者でいいや、冒険者の数は昨日と比較にならない。

初日に来た見覚えのある連中はメインダンジョンに入り、新規の連中も大多数がいきなりメインダンジョンに入る。

まあね……心構えが出来てて情報があるならいきなりメインダンジョンでもいいんだけどね……初心者の塔エ……

メインダンジョン組は悪臭放つスライムやらトラップやらに驚いていたが、戦闘慣れしている者ばかりのようでモンスターは鎧袖一触されていく。種族別にグループを作りいがみ合いバラバラな足取りで探索を進めていてもなお一層ボスのミニデーモンはその日の内に撃破されてしまった。

シルフィ、超上機嫌。今にみてる。

冒険者達の半分は手に入れた核を褒賞に変えて撤収していき、残

り半分はダンジョン内に泊まり込みで三日目の朝を迎えた。

二層からは迷路が複雑になり、モンスターと曲がり角で鉢合わせる事が増えてくる。攻撃すると猛烈な反撃をしてくるが放置していれば無害な道の端で茶を啜っているだけのAA風モンスターなどの色モノモンスターが出るのもこの階層からだ。ちなみに茶を強奪しても攻撃判定は受けない。

冒険者は若干手ごわくなってきたモンスターを物量で押して確実にほふっていく。ダンジョンも大した事が無いと判断したのか魔法を節約し始めた。

節約できるのも今の内。知ってるか？　ダンジョンでは一瞬の油断が命取りなんだぜ？

いけいけ押せ押せと進む冒険者達。二層ボスのオートマータも怪我人を出しつつも突破されてしまった。この世界には存在しない機械兵の姿に驚くかと思ったら全然そんな事なかったぜ。

なんでだろうと冒険者達の心を読んでみたら全員「また変なモンスターが出たよ、これだから精霊は」で統一されていた。はいはいごめんね！　ごめんねー！

そしてシルフィの機嫌が天元突破。嬉しいのは分かったから部屋を踊り回るのは止めてくれ、と思っただがなんだか楽しそうだったので皆で一緒に輪になって踊った。

もうどうにでもなーれ。

四日目、三層に突入。冒険者達は今まで鬱陶しい程度だったトラップが急に物理的にも精神的にも致死レベルになり戸惑っていた。油断していた何人かがトラップの餌食になったため行軍は慎重になる。死神さんって水晶越しでも見えるんだね。

四日目は三層の半分程度まで進んで地図を書き、モンスターが入って来ずボスを倒せば休息できるようになっている二層ボスの間に引き返していった。

明けて五日目。初めの数歩で再び数人がトラップに引っ掛かった。フハハハハ、甘いわ馬鹿ちゃんが。精霊のダンジョンは毎日トラップの位置が変わる不思議なダンジョン。いくら地図にトラップの位置を書き込んでも無駄無駄無駄ア！

八十人強に減っていた冒険者達はやっぱり協力せず、三種族バラバラに進んでいく。五日目ともなると披露が色濃く見え始め、身のこなしも精細を欠いてきていたが、他の種族に先を越されてたまるかという見え透いた競争心で全員前に進む事しか考えていない。

五日目は三層を三分の二程度進み、見張りを立てて休息をとり、六日目にボスの間を探して進む。

鬼気迫る冒険者達がボスの間に近づいてきた時、彼らの背後に一齐に鎌を持った死神さん達がわらわら現れた。えーと、冒険者の人数が……八十八で……死神さんの人数は……

「なに数えてるの？ トーゴ」

「……死神さんが八十五人、死神さんが八十六人、」
「ちよっ」

「死神さんが八十七人、死神さんが……八十八人」

「冒険者終了のお知らせ」
オワタ。

ダンジョン開店からひと月も経つと客足も大分落ち着き、リズムのようなものが出来てくる。

精霊指定都市以外からも噂を聞きつけて冒険者はやってきた。彼らはまずは初心者塔で体を慣らすなり実力を確かめるなりしてメインダンジョンに入る。賢明だ。初心者塔が無駄にならなくてほつとする。

ダンジョンに潜るのは連続三日までという暗黙の了解もできていた。五層、六層までですすめば片道三日以上かかると思うが確かに現状ではそれぐらいがちょうどいい。

ダンジョンで手に入る核に利用価値は無いが、交換で手に入る褒賞やボスが落とす宝箱がオイシイ。金の匂いあるところに人も集まるの法則でいつの間にかダンジョン周辺はちょっとした商店街になっていた。ちやっかり宿屋や歓楽街もできている。

攻略状況の方は相変わらずで、三層でストップしていた。

冒険者達は三層ボスが倒せないときりに嘆いている。あの竜巻が何回やつても避けられないらしい。ハッハッハ、てこずれてこずれ。具体的にはラスボスクリアまでに合計八百年てこずれ。

「ハッハッハッハッハッハッハッハ」

「トーゴうるさい。今いいとこなんだから静かにして」
「ごめんなさい。」

ーっつしてダンジョンな日々は過ぎて行った。

ダンジョンな日々（後書き）

ダンジョンはいいね。ダンジョンは心を潤してくれる。リリンの
生み出した文化の極みだよ

—
(´・ω・｀)
(つ≡つO
ゝ()
U - U U

→茶を啜っているだけのAA風モンスター

就活

ダンジョンを創って五年になった。攻略状況は四層三分の一ほど。三層ボスを倒したのは三種族混成パーティーだった。兎人がその俊敏さで敵を翻弄し引つ掻き回し、竜人が頑強な身体と強い肉体で中衛を受け持ち後ろに攻撃を通さない。そして魚人が後方から強力な魔法を叩き込む固定砲台となる。

戦闘中に半ば偶発的にできた配置だったが、種族の特徴を生かした役割分担は高い効果を挙げボスを倒すに至ったのだ。

以降仲の悪い三種族もダンジョン内に限ってはちらほらと「べ、別にアンタのためじゃないんだからね！ ダンジョン攻略のためなんだから！」という空気で異種族パーティーを組む者達も現れるようになった。不承不承感に満ち溢れているが取りあえず喧嘩はしなくなった。四層にもなるとモンスターとの戦いにも余裕がなくなり人間同士で足を引っ張り合っていると裏ダンジョンでひっそり幕を閉じる事になるからいがみ合ってる暇も無いだろうさ。

そしてパーティー効果がさり気なく地上にまで波及したのかダンジョン付近にできた街、ダンジョン街でも種族対立が和らいでいるようだった。ダンジョン街は精霊指定都市の外なので別に争いが禁じられている訳ではなく言い争いが殴り合いに発展してそのまま骨になる例もあったが、同じテーブルで静かに酒を飲んでいる異種族も割と見かける。

生死を賭けたダンジョンで同じ目的に向かって邁進する内にそこはかとないうち意識が芽生えてきているらしい。発芽率はあんまり高くないけどさ。

別に俺達は人間の仲直りだの三種族パーティープレイだのその辺りを狙ってダンジョン創った訳じゃあ無いんだけど、まー結果オーライ。

俺達精霊は日がな一日水晶を通して冒険者達の様子を眺めてニヨ

二ヨしている。

アレクも一、二年は俺達と一緒に観戦していたが、三歳になり肉体的に成人するとダンジョンに挑む様になった。トラウマを克服したかったのかそれとも別の理由があったのかは知らない。

自分一人で頑張りたいとの事だったので鼻屑はせずに見守っていたが、俺達の力を借りるまでも無くアレクは案外堅実に初心者の塔から力を蓄えていき、冒険者二年目にして単騎で三層まで行った。呪文が自由に作れるってのはやっぱり強烈なアドバンテージだったらしい。魔法に必要なレジステルの調達は三層後半の核から交換可能になるレジステルでなんとかしていた。えらい。

で、三層ボスは流石に一人じゃ無茶（ボスは倒しても1ヶ月で復活する）だったのでパーティー組んで作戦立ててタコ殴り、勝利。

ボスって一回倒されるとパターン組まれてハメ殺される事に最近気付いた。一層ボスなんて毎回復活した瞬間に集中放火喰らって倒されてるしさあ……いやまあ仕方ないんだけどね。なんかね。釈然としないというかね。

「ただいまー」

精霊達で額を寄せ合ってボスの行動パターンランダム変更を検討していると、ボスを倒してきたアレクがひよっこり戻ってきた。アレクには地上と最深部の水晶部屋を結ぶ直通転送魔法がかかったペンドラントを渡してある。

冒険者は皆最下層目指して四苦八苦してるのにアレクが自由に最下層に出入りしているのはおかしい気がしたような気分になったけど気のせいだったぜ。

現在のアレクの身長は170くらいか。白髪を肩にかからない程度に伸ばし、ぴょこんと生えたウサミミはイイ艶をしている。兎人の特徴としての細身はアレクにも適用されているが適度についた筋肉がひ弱さを感じさせない。白地に紅のラインが入ったスボンと赤地に白のラインが入った膝丈のローブを着たアレクは精霊に育てられたせいかとことなく神秘的で人間離れた雰囲気を出していた。

「おかえりー。食べる？」

「食べる」

シルフィが差し出したポップコーンをむしゃむしゃやりながらアレクは自分用の水晶球の前に陣取った。

以前はでっかい水晶球が一つあっただけなのだが、どの階層のどの位置を映すかでテレビのチャンネル争いの如く揉めたので今は一人一台が実装されている。ちなみに録画も可。

ダンジョンで人間が魔法を使えばマステルが溜まり魔法が使いにくくなっていくため、俺達はレジステルを吸収して回収しダンジョン内のマナ濃度を一定に保っている。お陰で俺の身体は随分成長して今では人間の大人と同じぐらいの大きさになっていた。もうジングルスには乗れない。むしろ乗られる。今も乗ってる。

先程アレク達がボスを倒してがらんどうになった三層ボス部屋を抜けて四層に降りていくパーティーをぼーっと眺めていると、いつの間にか俺の後ろにやってきたアレクが水晶球を覗き込んだ。

「おー、この人達良い装備してるね。四層半分くらいまでなら行けそう」

「死ぬよ」

「えっ？」

「この構成じゃ死ぬ。背後に死神さんが見える」

「なにそれこわい」

アレクはまじまじとパーティーを観察した。アレクが助けに行かないのはモンスターに殺されるのを防いでも死神さんが来た以上は何か別の要因で死ぬのが確定しているのと、単純に今から行っても間に合わないから。

パーティー構成は竜人二人とその背中に水を張った樽に入っで担がれている魚人で計四人。

兎人がいない。機動力がある攪乱役の兎人がいないパーティーに未来はにぃ。いくら装備が良くても包囲され物量で押されて捌ききれずに壊滅するのは確定的に明らか。

「そつか兎人がいないのか。あのパーティー、僕が入れば余裕で全滅回避できたのにね」

キヤーアレクサーン！

「……まああのパーティーの顛末はどうでもいいとして」

ギヤーアレクサーン！

「あのさ、今日知っただけだけど冒険者って職業として認められてないんだって」

「あー知ってる。休日之宝探しに行く感覚で浅い階層に潜りに来る連中多いから。本気で攻略してる連中は一割程度、あと二、三十年もすれば職業として確立されそうではある。んでそれとその深刻な顔にどんな関係が？」

「つまりさ……僕って今……無職だよな……」

「……………」

「……………」

なん……だと……

「トーゴ、どうしよう僕この歳でプーさんだよ」

「いや待て待て、アレクまだ五歳だろ」

「兎人は四歳で成人だよ」

なんて種族だ。

「核の褒賞で充分稼ぎはある」

「今日パーティー組んでた竜人にギャンブルやってるようなもんだって言われた。冒険者って人生を冒険してる者（笑）って意味なんだって」

「誰がうまい事を言えと」

「ちゅ？」

「あ、ジングルスとトーゴ達はいいいんだよ、人間じゃないから」

俺達が話していると案の定他の精霊達が水晶球をすっかり録画モードにしてからなんだなだと寄って来る。

「なにになにどうしたの？」

「アレクが無職だった」

「な、なんだってー」

「そう言えばアレク、職業訓練なんにもしてないよね」

「うん……」

鍛冶や商取引は言うに及ばず、農業だって種を蒔く時期や収穫タイミングなどの知識ゼロで始められる職ではない。誰かの小作人の様な立場なら就職できそうだが、この時代の小作人は奴隷と大差無い。

俺達が養えばいいって？ 馬鹿、それじゃニートだろうが。

しばらくあーでもないこーでも無いと話し合っていたが、レイラがふと思い出した様に言った。

「王様は？ あれって血筋さえあれば就職できるんじゃないかっかしら」

「それだ！」

忘れてた。アレクって王子だったわ。クーデターが起きただけなら国そのものはまだ残っているはず。

アレクに職業についての専門知識は無いが、俺や他の精霊が異世界のものを含む歴史の話を寝物語に語ってたから国がどんなものか政治がどんなものかは大体分かっているだろう。それだけで国を上手く回していけるほど簡単でもないだろうが、愚王にはならない確信がある。

「忘れてた。言われてみれば僕王子だったね。うん、王様になってみる。まずはお城に行けばいいのかな」

「あ、じゃあ俺アレクと契約して一緒にいてく。皆はどうする？」

「パス」

「スルーパス」

「キラーパス」

「ダンジョンの方が面白そうだ」

「気が向いたら遊びに行くよー」

「あ、そう。それじゃまたその内」

俺と俺の肩に乗ったジングルスとアレクはさらっと皆に別れを告

げてダンジョンを離れる事にした。

つけっぱなしにしていた背後の水晶球から冒険者達の断末魔が聞こえてきたが誰も気にしなかった。

就活（後書き）

そうだ、王様になろう

精霊主義

さて、アレクと契約するにあたり、しきたりに従って俺がアレクに貸す属性を限定する事にした。

火だの水だの他の精霊と被る属性にしても何も問題は無いがそれでは面白くないので新しい属性の開拓に挑む。時間止めたり過程を吹き飛ばしたり色々候補はあるけどやっぱこれ。

属性決定、運命。ベートーベンの交響曲第五番。

ではなく。普通にディステニーとかフェイトの方だ。

具体的には契約者の因果に常に干渉し続ける事でなんとなく物事が良い方向に転がる様になる。ハードラックって言葉を母の胎内に置き忘れて生まれてきたアレクにや必要ないかも知れんけどね、持ち前の豪運と精霊の補強があれば最強に見えるからさ。

それでまあ精霊指定都市を離れ、魔法で兎人城の方角を調べて出発。アレクが持っているのは大振りのナイフが一本のみ。水も食糧も魔法でなんとかなるからね。

精霊と契約しても普通は呪文のバリエーションに限りがあるからこう上手くはいかないもののアレクは呪文を作るから以下略。

魔法に頼り切ってるように感じるし事実その通りんだけど、実際荷物が少なく身軽な分不測の事態に素早く対応できるから悪い事ばかりでもない。第一スーパーラッキーモード入ってるから早々不測の事態なんて起こらん。

だから俺達は貧相な草がまばらに生えている凸凹した荒地をぴっぴき口笛吹き歌を歌いながらのんびり歩いていくのだ。精霊指定都市から真南、兎人の領土を。

石が退けられているから辛うじて道と分かるものの、舗装もへつたくれもない道。三種族一の身軽さバランス感覚を持つ兎人の領土は外敵の侵攻を妨害するためにわざと道を整備していないとか聞いた事がある。他種族が移動するのに四苦八苦する道でも兎人ならひ

よいひよい進めるから。兎人は忍者タイプだから障害物が多いのもプラス要素。ちなみに竜人の領土は逆に見晴らしが良いらしい。魚人は言わずもがな水辺と水中、河の中にもたまにいる。

「しっあわっせはー」

「ちゅー」

「あーるいてこーないー」

「だーから歩いってこっさせっるのー」

「ちゅー」

「いっちにつち三步」

「みいかで九歩」

「きゅーうほ進んでもういっばー」

「ちゅー」

そしてあとは口笛になる。歌詞覚えてないんだよね。別世界の歌の歌詞を魔法で知ろうとすると身長が数センチ縮むからやりたくない。やっぱ次元に穴開けるのはキツイのか、それともやりかたが不味いだけなのか。今度死神さんに聞いてみよう。

「トーゴ、リピート飽きた。別の歌ー」

「ええー……そうだな……うーさぎうさぎー、何見てはーねーるー十五夜おーつきさーまー」

「別に僕達は月見ても跳ねないよ」

「だまらっしゃい、俺の前世だと月にはウサギが居るって迷信があったからその関係。あと月の模様がウサギに見えるから」

「ウサギ？ 亀じゃなくて？ どうすればウサギに見えるの？」

「確かにこの世界の月の模様はまんま亀だけどそもそも世界が違う、模様が違う」

「ふーん」

毒にも薬にもならない雑談を挟みながらのんびりのんびりと。飛ぶと風情が無いから歩きオンリー。急いで王様にならにゃならん訳でなし、いくらでも時間はかけられる。

新しい社会体制が確立して王様なんてもういらねー、なんて事に

なつてたらどうしようかと思つたけどアレクの調べによれば軍部の強行政策が民衆の反感を買っているらしく。王族の近衛が突然暴走軍が早急にこれを鎮圧したものの国王夫妻は死亡、行方不明の王子が発見されるまでの間軍が政治を預かっているって話になっているらしい。

突っ込みどころ多すぎてどこから突っ込めばいいのか分からん。そんな簡単に反乱起こす連中が近衛に抜擢される訳ねーだろとか、なんで文官じゃなくて武官がさらっと実権握ってるんだとか、他にも色々。

民衆も当然そんな戯言信じちゃいない。軍は懸命に王子の搜索活動をしてるとかほざいているが生後数日の子供がランダム転送で突然放り出されたら普通死ぬし、運よく人間に保護され育てられたとしても一生涯自分が王子だと気づく事は無いだろう。転送時は裸で身分の証明になるものを見につけていなかったし、別に王族と言っても特有の身体的特徴がある訳ではないから。

しかしアレクは天文学的確率で他の何でもない精霊に発見され、今こうして王城へ向かっている。軍部の連中も寝耳に水だろう。感覚としては普通に通学してたら角で食パン加えた女の子とぶつかつてその女の子が転校生だった、ってぐらいか。つまり確率はべらばーに低いがお約束。

「やっぱ人間って面白」

俺の右耳に尻尾を引っ掛けてぶらぶらしているジングルスの腹を指先でくすぐりながらなんとはなしに呟いた台詞をアレクが拾った。

「トーゴも元人間でしょ」

「……ああ、そういえばそうだった。よく忘れる、というか今はネタ台詞だから。半分本気だったけどさ」

健全な精神は健全な肉体に宿するという。ならば精霊の肉体に引っ張られて精霊的思考になったのか。思い出してみれば人間だった頃は人間を観察して爆笑するような事はなかった。当たり前だが。

面白いのは精神が精霊的になってしまったのに違和感も恐怖も感

じない所。恐怖を感じなくなってしまった事に恐怖を覚える事も無い。生まれた時から精霊だった気すら、って生まれた時から精霊だったわ。

精霊は理論上絶対無敵の存在だから、命の危機感が薄く、更に食べなくてよし繁殖しなくてもよし眠らなくてもよしな存在。人間と似ているのは姿だけ。考えてみれば精霊になって人間の思考を保っている方がどうかしてる。

そんな精霊が世界の主役ではなく世界の香辛料的存在に収まっているのは我ながら奇跡的だと思う。精霊の気性が荒かったらこの世界終わってた。

そうして柄にも無い考え事に没頭している内に日が暮れ、荒地の中で適当に平らな場所を探して野宿の準備にかかる。といっても夕食の用意だけだ。

アレクは岩場の中に確保した平らな寢床の中心に立つと、ナイフ片手にその場でぐるぐる回り、適当な方向に投擲した。

「そおい！」

「ギギヨツ！？」

悲鳴が聞こえた。なんか当たったっぽい。アレクは満足げに頷いて岩場の奥に消える。

少し時間を置いて戻ってきたアレクがずるずる引きずっていたのはアレクの背丈の倍はある鶏冠があるこげ茶色の巨大な蛇だった。

脳天のド真ん中に見事にナイフが突き刺さっている。適当に投げてこれとか……

「トーゴ、大物狩れた」

「アレは狩りって言わねえ」

魔蛇バジリスク、その能力は魔眼。効果：相手は死ぬ。

いや眼を見なけりや大丈夫なんだけど。あと精霊も大丈夫。

「010110110100（炎よ）」

アレクが手のひらを地面の石ころに向けると握りこぶし大の火が灯った。肉はエビに似た味で美味というバジリスクを手際よく解体

し、細切れにした肉を手近な所にあつた枯れ枝に刺し、焼く。

精霊は食事の必要がないためこのバジリスクはアレクとジングルスのためのもの。可食部のみが切り出され三分の一ほどになったバジリスクだが当然アレクとジングルスで食べきれる量ではなく、残りは保存魔法をかけて次の日に持ち越しとなる。

焼きあがつた肉を美味しくそうに頬張るアレクとジングルスがちよつとうらやましかった。精霊は物を食べても意味が無いし、味覚が無い事も無いものの極端に鈍いし、魔法が効かないから味覚を鋭くする事もできない。ガッデム。

腹いせにばんばんになつたジングルスの頬袋を突いて吐き出させたら指に噛み付かれた。折れたのは指じゃなくてジングルスの歯で所にさりげなくチートを感じる。

食事の後は灯した火が消えるまでアレクと魔法で創ったトランプでポーカールをやったがやつぱり一度も勝てなかった。くそ、運命属性になんてするんじゃなかった。なんだよロイヤルストレートフラッシュ二連続って。乱数仕事しろ。

精霊主義（後書き）

数学の勉強しようよ！　　く精霊物語式呪文の作り方

？日本語で詠唱を書く

？母音ごとに対応した数に直す

ん	o	e	u	i	a
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
6	5	4	3	2	1

？二進数に直す

上記で出した数をxとし、

$(2 \text{ の } n \text{ 乗}) - 1 \times \sqrt[n]{2 \text{ の } (n + 1) \text{ 乗}} - 2$

の形を作る。ここで呪文はn桁になる事が分かる

？

0をn個並べておき、

$$x + 1 - (2 \text{ の } n \text{ 乗}) = y$$

の式を作る。

$$y = (2 \text{ の } k \text{ 乗}) + z$$

として並べておいた n 個の 0 のうち $(k + 1)$ 桁目を 1 に変える

$$z = (2 \text{ の } t \text{ 乗}) + r$$

として $(t + 1)$ 桁目を 1 に変える

以下繰り返し。

念のため書いておきますが 2 の 0 乗は 1 です。

? 完成

もっと簡単な計算式もありそうですが私はとりあえずこの式を使っています。要は二進数にできりゃいい。なお k 、 t の値の範囲指定が不足していますが察してください

$e x$. 「硬化せよ」を呪文にしたい場合

硬化せよ = koukaseyo = ouaeo = 531
45

(2 の 15 乗) 53145 (2 の 16 乗) - 2
15 桁

5 3 1 4 5 + 1 - 3 2 7 6 8 = y

2 0 3 7 8 = (2 の 1 4 乗) + 3 9 9 4

1 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0

3 9 9 4 = (2 の 1 1 乗) + 1 9 4 6

1 0 0 1 0 0 0 0 0 0 0 0 0

1 0 0 1 1 1 1 0 0 1 1 0 1 (硬化せよ)

追記、感想欄でもっと効率の良いやりかたがあると発覚

Xを2進数に直す場合

$X \div 2 = X' \dots \text{余り } 1 \text{ or } 0$ (仮にaとする)

$X' \div 2 = X'' \dots \text{余り } 1 \text{ or } 0$ (仮にb)

$X'' \div 2 = X''' \dots \text{余り } 1 \text{ or } 0$ (仮にc)

...

と答えが0余り1になるまで続けて

...cbaとなるように余りの部分を下から並べると変換できる

今までの苦労は一体なんだったんだ畜生

この小説を読む上で呪文の作り方を覚える必要は全くありません。

襲撃

荒れ地を抜けると小さな村が点在する森時々草原に入り、辺境の村に宿屋などある訳無いので民家に泊めてもらった。

兎人と言っても別に兎そのものでもないので地面に穴掘って巣を作るなんて事は無く、極々普通の木造平屋もしくは二階屋。特に特徴も無い特徴が無いのが特徴の家々だった。つまらん。

精霊（俺）を連れてくるアレクはどこに行っても深海のチョウチンアンコウの如く目立った。精霊と契約した人間は大抵正か負かの方向に偉業をなす。言うなれば未来の有名人のようなもので、宿を借りれば決まって今までの冒険譚をねだられる。アレクの泊まった民家には夜になると暇な兎人が話を聞きに押し寄せた。

アレクが精霊指定都市から来たというとなるほど噂の、と納得し、更に実は王子なんだ、と言うと絶句する。精霊契約者は嘘をつかないからアレクの台詞を疑う者はおらず、驚きが過ぎると皆アレクを歓迎した。

精霊の何が凄いつて魔法も凄いがここも凄い。真の意味で精霊が黒と言えば黒だし、白と言えば白である事は数千年の歴史が証明しているしこれからもそれが変わる事はない。精霊による保証はあらゆる儀式、誓約に優越するほど信頼性が高かった。

中には触らぬ精霊に祟りなしと関わろうとしない兎人もいたものの（自分で言うのもアレだけど大いに納得できる）大多数はアレクの即位に積極的協力の姿勢を見せる。

新しい軍政権は村から働き盛りの若者を強引に徴兵し王城の城下町に集めて訓練を行っているとかで大層評判が悪い。働き手を奪われた村は収穫も種まきも雑草とりも満足にできず、生産力は年々低下していく。

平時なのにこんな無理やってどうするんだらう。馬鹿なのか。馬鹿なんだらうな。王子を殺し損ねたとは言えクーデターを成功させ

実権を握ったんだからただの馬鹿でもなさそうだけでも。

考えてる事は言うまでもなく他種族討伐なんだろうけどさ、もうホントツこいつらこりねーな。ちよっと国に余裕ができるとすーぐこついう事する。

無理やり一気に徴兵してどうするつもりなんだか。一気に訓練して一気に攻め込む腹積もりか。軍部が暴走して歯止めが効かなくなってるのか。勝てば官軍とでも思ってるのかね？ よくわからん。

どの道これから（アレクが）叩き潰すからどーでもいいんだけど、ダンジョンを起点に流れが種族融和に向いているとは言えまだまだにつくき他種族、兎人の総意として敵を討ち滅ぼしたいのは山々でも日々の暮らしを困窮させてまでもしたい訳ではない。

ああ王様が国を治めていた頃は良かった、と昔を惜しむ村人達はこぞってアレクを支持し、快く出立を見送ってくれ、村に泊まるたびにアレクは支持者を増やしていった。アレクが宿泊した村を起点に噂が広まっているらしく、自己紹介と宿交渉をするまでもなく始めから歓迎ムードの村もあった。

しかし流石に王城が近くなり村が町の様相に変わってくるとそうもいかない。

政権と言つか軍部の統制が地方よりも厳しくなっているようで、表立ってアレクを歓迎してくれる人はいない。

軍部の建前は王子代行だからアレクは歓迎されてしかるべきなんだけども、とある町の町長がこっそりリークしてくれた所によると王子に積極的協力姿勢を見せた者は不穏分子としてマークされるらしい。汚い流石軍部汚い。

いくら民衆にアレクに好意的な兎人が多いとは言えど当然全員が全員そうでもなく、軍部の裏事情を承知の上でに密告と言つか報告と言つか「王子発見、ただし精霊付き」と知らせる者もいて、場所情報を流されて（こっそり移動してる訳でもないから流すものにもないが）暗殺者が送り込まれてきた。

それを片端から返り討ちにして物ともしないアレク。精霊契約者

は伊達ではないと悟った敵方は毒を盛ったり（魔法で即解毒or偶然口にせず済む）金や色気で籠絡しようとしたり（金には興味無し、ハニートラップは逆に向こうがアレクに惚れていた）、あの手この手で裏からアレクを葬ろうとしたがやっぱアレクの歩みを止める事は出来なかった。小細工なし、精霊による身分証明と精霊契約、民衆の支持を引っさげてずんずんまっすぐ王城に進行していく。

あちら側は本音と建前の板挟みでコソコソとした小細工に頼らざるを得ない。

俺とアレクと、多分ジングルスもああこりや勝ったな、と思った。なにせ負ける要素が無い。

アレクは王様になったら結婚するらしい。そろそろいい歳だし、件の色仕掛けをかけてきた美人な兎人が安全な村でアレクの帰りを待っている。

ダンジョン生活であまり恋愛運に恵まれなかったアレクも好きだと言われまんざらでも無いらしく、最近では体が軽い、こんな幸せな気持ちで戦うなんて初めてだ、もう何も怖くない！などと言いながら鮮やかに一方的に刺客を迎撃している。

で、あと町を二、三経由すれば王城に到着、という所でようやくと城の方から団体さんで正式な迎えが来た。カッチリと甲冑を着た騎士が十人ほど、酒場も兼ねた宿屋の一階にドアをばかんと開けてどやどや入って来ると、テーブルでフルーツサラダをついていたアレクに一斉に敬礼する。

代表なのか彫りの深い背後に立つたら撃ち抜かれそうな顔をした兎人が一步前に出てきた。

「我が名は王騎士ゴルゲ。あなた方は亡き先王の御子息、そして深淵の精霊トーゴ様とお見受けしますが」

なにその厨二な二つ名カツコイイ。

「そうだけどなんの用？暗殺に飽きたから真正面からいよいよもって死ぬが良いつて事？」

「は？ いえ、そのような事は。お迎えに上がりました」

一瞬首を傾げた騎士ゴルゲは恭しく頭を下げて言った。

王子帰還の噂が国中に蔓延しここまで王城に近づいてからそれを言うか。なんとという今更感……

「なんとという今更感」

言っちゃったよアレク。正直過ぎるのも考えものだ。

アレクの言葉にゴルゲは苦笑して答えた。

「失礼ながら殿下を偽る偽物である可能性を考慮し念入りに事実確認を行わせていただきました。遅参をお詫びすると共に御帰還心より歓迎致します」

「ふーん……トーゴ」

「嘘は言ってない。少なくともこいつはそう信じてる」

「信じてるってどういう……ああなるほど」

チラリとアレクはゴルゲの一步後ろで直立不動で整列している他の騎士達に目をやった。

軍部も一枚岩ではないのだろう。組織としてはアレクぶつ殺！でも、中には本当に建前を信じてアレクを王に据えようとしている者もいるようだ。ゴルゲとか。

「王城に着いたら僕はこういう扱いになるの？　すぐ即位？」

「いえ。命名の儀、成人の儀がお済みでないので先ずはそちらからとなります。それが済めば明日にでも式典と共に即位を。民は殿下の帰還を心待ちにしております。勿論私共も含めて」

「……本心で言ってる？」

アレクの質問には騎士全員が一斉に「はい！」と実にイイ声で答えた。

「トーゴ」

「大丈夫だ、問題無い」
「把握」

精霊と契約している以上、アレクにも嘘偽りは通用しない。ならば腹に一物抱えた主犯格よりなにも知らない奴を迎えに出した方がいい、と。流石に王子代行を掲げておきながらアレク到着まで表の

アクションを何も起こさないのはまずいだろーしさ。

ともあれ迎えの騎士達は嘘ではなく本心から皆アレクの味方であるらしい。信用して合流する事にする。

ちなみに騎士達にかけられていた何かの特定ワードに反応するらしい暗示操作魔法はアレクが即座に解除した。

以前俺が語って聞かせた前世の小説になんかそんな展開があつたからなんとなく試してみたそうで、アレクもまさか本当に暗示がかけていたとは思わなかったとか。誰が良からぬ事を企んでいたのかは知らんがなんとなくでこんな適当に解除されたんだからたまつたもんじゃないだろう。南無ー。

「じゃ、行こうか」

「まさか我等にこんな楔が打ち込まれているとは、一体上官は何を考えて……はっ！？ ……いえ、我共は殿下がお食事を終えてからでも構いませぬが」

「いやなんとなくね」

不思議そうな騎士達を引きつれ床で胡桃の殻に齒を立てていたジングルスを懐に入れたアレクが宿屋を出た三秒後、背後で大爆発が起きた。

バラバラになって派手に飛び散る木片を鎧に浴びつつ騎士達は素晴らしい即応と連携でアレクを庇う様に円形に展開した。数秒して破片が全て地に落ちると、宿だった場所は柱の残骸と瓦礫を残すばかりとなっていた。瓦礫のしたからは苦痛と呻きの声が聞こえる。

「何事だ！」

「爆発だー！」

「それは承知しております」

「だよね。犯人あっち。多分女。フード被ってる気がする」

「それは……探索魔法でしょうか」

「いや？ ただの勘」

「……………ウーサ、ヒョンダー、確認してこい。怪しい者を発見した場合私の権限で捕縛を許可する。多少手荒な手段を執っても構わ

ん。アングルとノウサは瓦礫から救助を、残りはこのまま殿下を御守りしろ。この爆発が殿下の御命を狙った物であるならば追撃があるかも知れぬ」

指示を受けた騎士達が了解、と短く言って輪を離れる。指示を飛ばしたゴルゲは厳しい表情で剣を抜刀して構え、集まりだした野次馬を警戒していたが、不意に何かに気付いたらしくアレクに尋ねた。

「先程仰っていた暗殺とはもしや」

「うん、こんな感じの。暗殺って言っけど段々あからさまになってきてるんだよね。なんでだろ？」

「あちらさんも焦ってるんじゃない？ その内町ごと爆破とかやりそうな予感」

「あらら、まいったねー」

全然大した事が無さそうに言うアレクと俺にゴルゲは緊張を削がれたらしい。アレクを見て、俺を見て、深々と溜め息を吐いていた。なんだよ全部精霊のせい、みたいな顔しやがって。大体その通りだよ。

俺の予感の外れて町ごとぼかなんて事はなく、散々チクチク命を狙われたものの無事王城に着いた。

最後の方なんてもう隠す気も無いらしく白昼堂々数人がかりで襲ってきたんだけどさ。まあやけっぱちに見えて殺害に失敗したと悟るや齒に仕込んだ即効性の猛毒で自殺して明確な足跡を残さないあたり、なかなかどうしてやるもんだと思う。

ここ一週間ほどアレクを護るために奔走しまくった騎士達はげっそりしているが、アレクは騎士達のエネルギーを吸い取っているのかと思うほど元氣一杯だ。理不尽だが騎士達は本望だろう。

いよいよ王城の城門前。見上げるほど高い城門鉄扉は固く閉ざされておき、物見やぐらからの誰何の声にゴルゲが声を張り上げて答えた。しばし待てと言われ、騎士達は油断無く構え気を張る。数えるのも面倒になる数の襲撃を経験した騎士達はもはや全く軍部を信用していなかった。昨日の夜なんぞは連中が力ずくで権力を奪ったように、今度は力ずくで王政を取り戻してやると息巻いていた。頭数ではボロ負けもいーとこだけアレクがいるからいけると思う。まさかこの時はあんな事になるなんて思っ……おお、城門が開いてく。

そして軋みながらゆっくりと開いた城門の向こうには銃口をこちらにむけて構えた兵士がずらりと並んでいた。

なあにこれ。

「……なんのつもりだ」

ゴルゲがドスの効いた低い声で問う。銃兵の後ろでふんぞり返っていた上官らしき豪華な服を着た小太りの兎人は白々しく答えた。

「歓迎ですよ。今のこの国の最新武器の迫力を身をもって知っていただこうと思ひまして。王たるもの自国の軍備は把握しておくべきでしょう？ 私どもなりの歓迎法でございます。なに、空砲ですから問題ありません。構え！」

なんだかその言葉は一直線に心に響いた。胸がドキドキする……
この気持ちはもしかして……殺意？

なるほど精霊が嘘を嫌う訳だ。これはダメだ。許せんし許さない。
強いて言うなら胃の中に直接ヘドロをぶち込まれた感覚。嘘つきや
がったあん畜生を今すぐフルボッコにしてやりたい。

精霊になつてから今まで嘘をつかれた事がなくて良かった。精霊
が精霊の里でのんびりしている事が多い理由が分かった気がした。
人間世界は面白いけど、嘘つかれるとストレスが貯まるから。

それはともかくとして……

これ絶対入ってるよね。弾入ってるよね。空砲じゃないよね。向
こうは引き金引くだけだから詠唱するより早いよね。やばいよね。
俺以外蜂の巣の危機だよね。

騎士達は決死の覚悟を決めた表情でアレクを庇って前に出た。単
なる銃では鉄の鎧を貫けないが、向こうもそれは承知だろう。当然
前もって魔法で強化している事が予測される。

「殿下、ここは我々に任せお逃げ下さい！」

「死ぬよ？ 死亡フラグの意味で」

「死亡ふらぐが何かは存じませんが、殿下を御守りできるならばこ
の身砕けようと構いませぬ！」

「……って言ってるけどどーなのトーゴ」

「誰も死なない。死神さんの姿無し」

「なんですと？ この状況で誰も死なないという事が有り得るので
すか」

「セイレイウソツカナイ。あなた達とは違うんです」

くつちゃべつていると小太り兎人が片手を上げ、ニヤニヤしながら
振り下ろした。

「ふ、最後のお別れは済んだかね？ 撃てエ！」
「がちゃちゃん。」

「……………」
「……………」

「……おい」

「はっ！」

「撃てと言っている」

「はっ！ 弾が詰まったようです！」

「は？」

全員ジャムっていた。

一方この騒動の際にこっそり城に侵入していたジングルスは食糧庫のチーズを喰い荒らしていたらしい。

銃兵達は流石によく訓練されているらしく即座に銃を捨てて魔法を撃ってきたが、出鼻をくじかれたのは痛恨だったようでアレクの広範囲殲滅呪文で一網打尽にされていた。あっさりと入城を果たしたアレクは指揮官だという小太り兎人を含めて簀巻きにして転がし、城内にいた残りの兎人を全て城門前に集めた。そして叛意ある者を嘘発見器（精霊）で見つけ出し、城からたたき出す。

人員がほとんど三分の一に減ってしまいこのままでは政務に支障が出る状況に陥ってしまったが、どうしたものかと悩んでいると実に都合よく応援が来た。精霊指定都市でアレクがコネを作った兎人達だ。アレク即位の噂を聞いて駆けつけたらしい。

冒険者と言っても筋肉馬鹿ばかりではなく、没落貴族やらインテリ派も割という。そういう連中を文官に回し、残りを武官につけてアレクの王権の体制は人員だけとは言え実に数日で整ってしまった。精霊すらひきつけた人望の賜物だ。入城から五日後、戴冠したアレクは民衆の熱狂的支持をもって迎えられる事になる。

精霊の愛し子、アレクセイによる精霊王朝の始まりだった。

襲職（後書き）

まあなんかそんな感じの襲職劇。

嘘みたいだろ……最終話なんだぜ、これ

精霊辞典とエピソード

深淵の精霊：トーゴ（[♂]）

その契約魔法は運命

灰髪、灰目。イムリシト朝78年から活動が確認されている。比較的新しい精霊であると推測されている。

精霊王朝で有名な精霊であるが、ダンジョンの概念を創り出し、始まりのダンジョンを創ると共にダンジョン時代の発端を作った精霊でもある事はあまり知られていない。

彼の特徴としては常にジングルスと呼称される一匹の不死ネズミと行動を共にしている事、また「死神」が見える事が挙げられる。

「死神」については長年議論されているが、比喻表現としての「死」「死の気配」を指しているのか、はたまた実際に生ける者に死を齎す「死神」なる存在が居るのかは分かっていない。ただ、彼の言う「死神」が背後に現れた者は数分以内に必ず死ぬ。精霊でさえ助ける事はできないようだ（本人の証言）。

精霊王朝が滅びた後は死神について人間に語る事は無くなり、死神と彼が親しい関係にあるとの未確認情報があるが真相は闇の中である。

彼の契約魔法は少々特殊であり、自動的に発動し続ける。精霊の愛し子アレクセイの例に見られる様に常にとてつもない幸運を契約者に齎すものである。攻撃や防御や補助は全く期待できないが、世界を味方に付ける筆舌に尽くし難い幸運はそれを補って余りあるだろう。

また精霊達の中でも殊更に奇妙な発想をする精霊であり、彼が活動しはじめたと目される時代から精霊の言動や行動に若干の変化が見られる。

近年は数人の精霊と共に各地のダンジョンを転々としているようである。

補足：ダンジョン時代

精霊指定都市に創られたダンジョンを始まりとした冒険者と精霊の時代。この時代は精霊の里から多くの精霊が人間世界に現れ、世界中に無節操にダンジョンを創った。有名なダンジョンとしては世界樹迷宮、天空迷宮、地下迷宮、海底迷宮が挙げられる。この時代は八百年ほど続いたが、精霊達が飽きてしまい多くのダンジョンは放置された。放置されたダンジョンはマステルが濃くなり魔法行使が困難で、攻略は難しいもののそれ以外は普通に利用できる。

余談だがダンジョンは十層まであるらしく、最も攻略が進んでいるダンジョンは地下迷宮の八層である。

精霊辞典とエピソード（後書き）

いくつかあったルートの中の最短経路で終了。伏線は一応全部回収した、はず。

想像の余地が残る終わり方ってどうなんだろう。もやもやするじやねーか！ と糾弾されるか妄想を膨らませてニヨニヨしてもらえるか。書き方次第ですかね？

なにはともあれ

御愛読有り難うございました。

2011/5/31

クロル

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8469m/>

精霊物語

2011年5月31日16時40分発行